

ウィンドランダの胡椒 南インド～北イングランドの貿易ネットワークを辿る

アンデス・カールキビスト

1. 序文*

北イングランドの要塞で1973年、木製の書き板が初めて発掘された。その後次第に多くの書き板が見つかる（Birley 2011:22-26）¹⁾。ウィンドランダはローマ帝国の軍によって紀元後1世紀に北イングランドに建てられた要塞であったため、軍事と関連する書き板が多いが、公事や私事の内容もある（Bowman 2003:10）。これらの書き板のうち、一枚は紀元後120年代に書かれた買い物リストである（「*Tab 184*」）。この書き板には様々な商品が記されているが、その中に胡椒（*piper*）も載っている（Bowman と Thomas 1994:135-7; Birley 2011:105）。

周知の通り北イングランドでは胡椒は採れず、紀元後1～2世紀のローマ帝国で消費された胡椒は全て南インドからのものであった（Miller 1968:80-81）。よって、ウィンドランダで買い物リストに「胡椒」を記した兵士は南インドから北イングランドまで運ばれた商品を購入しようとしたことになる。この貴重な資料は驚くべき長距離貿易のネットワークが存在したことを示している。

ローマ帝国の長距離貿易については古くから研究が行われている（Warmington 1928; Teggart 1939; Wheeler 1954 参照）。この初期の研究は大陸のルートを強調しているが、最近では海のルートも注目されている（McLaughlin 2010; Tomber 2008; Sidebotham 2011 参照）。これまでの研究がルート、商品、航海術などのような物理的で技術的な要素を探索しているのに対して、本稿は、貿易の裏に働いている経済的な事情（第2節）を分析の上、貿易ネットワークの参加者（第4節）にとってこの長距離貿易がどのような意義があったのかについての新しい成果を目指している。

幸い、古代ローマの人々を書くことを好み、中世の修道院に多くの文書が保管されていたので（Janson 2002:119-20）、古代ローマの研究にとってそれらの文献は大切な資料の一つとなっている。考古学的な資料も次第に増えている。本稿の舞台となっている南インドから北イングランドでも様々な遺跡が発掘され、多くの資料が出土している。これらの資料を分析しながら、現代の研究を参考にし、ウィンドランダの胡椒が歩んだ道を辿っていくこととしたい。

* 校正やアドバイスを頂いた岩手県立大学盛岡短期大学の石橋敬太郎先生、盛岡市の八木光則先生、岩手大学教育学部の安井もゆる先生方及び『アルテス・リベラレス』への掲載推薦をして下さった岩手大学人文社会科学部の樋口知志先生に感謝を申し上げます。本稿にある全ての誤りは著者の責任である。

1) これらの書き板は日本で現在利用されている葉書のような大きさで、厚さは僅か1～3ミリの薄さ。葉書と異なり、文書が書かれた後に書き板は半分に分かれ、閉じられた（Birley 2011:33）。

2. ローマ帝国の経済的背景

ウィンドランダの書き板に胡椒が記されている理由は貿易にある。言うまでもなく、長距離貿易がなければウィンドランダに配属された兵士は胡椒を購入できなかった。書き板に記された「*piper*」の前にチェックマークがあるため、実際に取引は完了されたものと思われる (Bowman と Thomas 1994:135)。

さて、長距離貿易を実現させるためには幾つかの経済的な条件が満たされなければならない。経済学では需要と供給の両面から経済的な課題を考察することが一般的となっており (Cipola 1994:3 参照)、次の4つのテーマで供給と需要を分析し、ウィンドランダの胡椒を考察していきたい。(1) 原動力。投資をし、資産を増やす欲求はローマ人にあったのか？(2) 資本。長距離貿易を実行するためには資本が必要。その投資を可能にする十分な資金がローマ帝国にあったのか？(3) 購買力。貿易の利益には消費者の存在が必要だが、外来商品を購入できるローマ人は居たのか？(4) 市場。売り手と買い手が会う場所は市場であり、ローマ帝国内に長距離貿易を支える市場はあったのか？

2-1. 原動力

ローマの上流階級は、土地以外の資産に興味がなかったという意見は以前よりあったが、最近では異議も唱えられている²⁾。下記の農業、貸借、産業を見ながら、ローマ人の原動力を覗いていく。

2-1-1. 農業

ローマ帝国の経済は、全ての未工業化国と同様、農業に頼っていた (Erdkamp 2009:12)。この基本的な生産業の合理化を目指し、産出量の増加を求め、利益を高めようとした行動が文献から窺い知ることができる。共和政ローマの最後の200年(紀元前2～1世紀)、イタリアで幾つかの町が成長し、都市になった。首都のローマは空前のスケールで人口が増えたが³⁾、他の町も以前より大きくなった。これらの都市の後背地から採られた食材は都市内で良い値で売られた。

この機会を狙った上流階級は都市の後背地で土地を購入し、都市で要求されていた農産物の栽培を行った。これらの農地はウィラ (*villa*) と言い (本稿はラテン語の名詞を主格の単数形でイタリック体で記す)、別荘の機能もあったが基本的には農場で、ウィリクス (*vilicus*) とい

2) これまでの意見によれば、ローマの数少ない富裕者は土地に投資し、貿易は地方にある農産地から首都に農産物を輸送することに限られたとされている (Bang 2011:110-121参照)。1970年代に強い影響力を及ぼした論を発表したFinley氏はこの主唱者の一人であり (Finley 1973)、賛同者は (反対者から)「プリミティブスト」と呼ばれている。その反対者は「モダニスト」と自称し、この呼称 (「現代風」) が示す通り、彼らは古代ローマの経済と現代の経済は類似が多いと論じている。近頃、この派の影響力が強くなり、賛同者が増えている。これらの主唱者の中には例えば「プリミティブスト派」であるBang 2011 (初版2008) に反論するSilver氏 (Silver 2009a) やローマの経済は17～18世紀の北ヨーロッパの経済に類似すると論じるScheidel氏とFriesen氏 (ScheidelとFriesen 2009) がいる。ただし、「プリミティブスト派」と「モダニスト派」は正反対の立場から古代ローマの経済を見ているようであるが、実際の差はあまり大きくなく、多くの同意点もある (Saller 2005:223-7参照)。

3) ローマ市の人口は期間内に20万人から100万人に増えたとされる (Morley 2002:38-9)。

う管理者と奴隷や借地人が耕作した (von Reden 2013:270-1; Kehoe 2013a:554)⁴⁾。庶民の小型の個人農地から上流階級の中型のウィラへの生産方法の変化は、都市が生まれると同時の紀元前2～1世紀に起きた。一般の農家の小さな農場は上流階級に買われ、ウィラが構築された。

ローマ人上流階級によれば、ウィラは所有者が消費する全ての農作物を提供することが理想とされた。しかし、その理想は現実的ではないとマルティアリス (紀元後約40～103・104年, Schakleton Bailey 1993:1-4) は語っている (*Epigrammaton* 7.31)。一般農民が生活のために今まで農作物 (主に穀物) を作っていたに対し、上流階級はウィラで都市の市場で大きな利益で売れる換金作物を作らせた⁵⁾。

紀元後1～2世紀の次の段階で多くのウィラはラティフンディウム (*latifundium*) に変わる。これは更に大きな農場なので、より効率的に農作物を生産することができた。スケールが大きいため換金作物だけではなく穀物や肉も生産され、大きな利益が得られた (Kehoe 2013a:554-5)。

収穫の量を増やすため、ローマの農家は様々な方法を取り入れた。キケロ (紀元前106～43年, Tempest 2011:xi-iv) が語るように、川から水を引く灌漑はその方法の一つで、既存の街道からウィラまで道路を通すことはまた別の方法であった (*Epistulae ad Quintum Fratrem* 3.1)。また肥料を使うことも行われ、動物や人間の排泄物を堆肥とし、様々な灰も使われた (Kron 2013:159-60)。輪作はそのまた別の方法で、大プリニウスは幾つかの輪作法を述べている (*Naturalis historia* 18.50-52)。利益を増やすための異種交配はまた別の方法で、これによって新しい種類の果物も多数できた (Sallares 2013:29; Kron 2013:164-5)⁶⁾。

農業はローマ帝国の経済にとって最も基本的な産業であって、その中で合理化 (小型農場→中型ウィラ→大型ラティフンディウム) と産出量の増加 (灌漑, 道路, 肥料, 輪作, 交配) に励むローマ人の姿が浮かびあがってくることから、彼らには利益を探る原動力があったと言える⁷⁾。

4) コルメッラ (紀元後初頭～60年代, Harrison 1941:xiii-vi) によれば鎖で拘束された奴隷と、自由に移動できる奴隷が共にウィラで使役された (*De re rustica* 1.6)。地主の代わりにウィラの運営を監督するウィリクスは極めて重要な存在であった。ユウェナリス (?～紀元後130年代, Morton Braund 2004:18-9) が風刺しているように地主は自分の野菜畑のウィリクスになることが理想だったが、現実的ではなかった (*Satires* 3)。ウィリクスの大切さを強調する大プリニウス (紀元後23・24～79年, Murphy 2004:2-4) は、忠実で、聡明なウィリクスは貴重な存在だと述べている (*Naturalis historia* 18.7)。従って需要は大きく、老練なウィリクスを雇える地主は少なかったとコルメッラは残念がる (*De re rustica* 序文12)。(各人名後は生年～没年と生死年間の出典を示す、下記同様。)

5) 2つの大切な換金作物はオリーブオイルとワインであったが、これらの産物を探るため、大きな投資が必要で、それには土地・役畜・道具だけではなく、時間も必要である。オリーブの木は実を結ぶまで20年かかり (Miggeot 2009:70)、葡萄の木も成長まで長い年月を要す上に、育てるには年中間がかかる (Erdkamp 2009:15, 75-6; コルメッラ *De re rustica* 1.9)。

6) 帝国の領土膨張に応じ、今までそれには適さなかった地域でワイン栽培できるように寒気に強い品種を作ったり、ヒットするワインの醸造を目標に新作の葡萄種類を生み出そうとしたりした (Morley 2002:117-8; Kron 2013:162-3)。人気の果物品種を交配できた人は有名になれたと大プリニウスは語っている。この記録の後には彼は様々な品種について説明を行っており、そこでは40種類以上の梨や30種類以上のイチジクが列記されている (*Naturalis historia* 15.15-6, 15.19-21)。葡萄の種類も多く、最も知られている種類しか取り上げられないと言いつつ80種類以上を挙げている (*Naturalis historia* 14.4)。

7) 大プリニウスによればHS 600,000で低質の農場を購入した知人は、溝を掘ったりして、8年間で土地の改良を行ったのち、その農場で収穫された1年の収穫葡萄を手摘みもせず木に残したままの状態ですら、それでもHS 400,000もの価格で売ったとされる (*Naturalis historia* 14.5)。HSはセステルティウス, *sestertius*, と言う黄銅で鑄造された硬貨で、研究者に基本金額として扱われている。

2-1-2. 貸借

ローンは通常行われていた取引で、個人に限らず町、神殿、財団、銀行、質屋、金貸し、商人などが金銭を貸し出していた (Howgego 1992:14)。一般の金持ちは資産を土地の購入と現金を貸すことの二方に分けていた (Harris 2006:9-11)。多くのローンは仲介者経由で行われ、セネカ (紀元前1～後56年, Reinhardt 2008:vii-x) はその幾つかの仲介者を取り上げている (*Epistulae ad Lucilium* 119.1)。債権者 (*creditor*) を探す仲介者 (*intercessor*) はローンの準備をし、場合によって保証人にもなった。仲買人 (*proxeneta*) はローンの手配に限らず、売買契約書も用意できた (Silver 2009b:250-1 参照)。最大の金利は法律によって年間12%に制限されていたが、法律を回避するため金利の代わりに手数料や利益のシェアを払わせる多くの方法があった (Howgego 1992:27)。収益は少なくなかったため、融資は資産を増やすための効率的な方法の一つだった (von Redden 2013:280)。銀行家 (*argentarius*) は預金を受けるだけでなく、利益を増やすため貸し出しも行った。多くの銀行家は競売で活躍していた。買い手の代わりに売り手に買い入れ金額を渡し、買われた物 (土地や商品) はローンの担保にもなっている (Howgego 1992:15 参照)⁸⁾。

大きな金銭を貸せないか貸したくない何人かの貸し手は協会 (*societas*) を組織し、金銭を集めて一緒に貸すこともできた (von Reden 2013:281)。これらの協会のメンバーは互いの資産に影響を与えるので、キケロは信用できる仲間を選ぶ必要性を強調している (*Pro Publico Quinctio* 3-9)。裕福な上流階級は金銭的に困った地方の支配者にも金銭を貸していた (Harris 2013:515)⁹⁾。

上述のローン (担保がある、例えば土地や商品) と違って、担保のない高いリスクのある信用貸しもあった。信用貸しは特に長距離貿易の場合に多かった。銀行家は返金できる保証がなくとも、例えば海を渡った長距離貿易を行おうとした借り手に信用貸しするときがあった (Harris 2006:11)。広い海を越えた長距離貿易はリスクが大きいので、何人かの貸し手は場合によって協会を構成し信用貸しした (von Reden 2013:281)。

農業に限らず金銭を貸すことで資産を増やそうとしたローマ人は多く存在した。つまり、ローンの面からもローマ人の経済的原動力がみられる。貯められた動かない金銭は経済を煽らないので、ローマ人が頻繁に行っていたローンや信用貸しは帝国の経済に勢いを与えていたとも言えよう。

2-1-3. 産業

農業以外の産業にも利益を高めるため投資が行われていた。以下ではさらに2つの例を取り上げ、地中海の魚保存加工業及びローマのガラス製造業を見よう。

8) スエトニウス (紀元後約70～約122年, Bradley 1998:2-5) が書いていることだが、アウグストゥス皇帝 (紀元前63～後14年, Eck 2007:165-168) と敵対していたマルクス・アントニウス (紀元前83・82～30年, Goltz Huzar 1978:3) のプロパガンダによれば、アウグストゥスの祖父も父親も銀行家だった (*Divus Augustus* 2, 3, 70)。この記録によれば、銀行家は上流階級 (貴族) に相応しくない職業だと視える。一方でキケロはタルクイーニア市で大変尊敬されていた市民の一人について語っている (*Pro A. Caecina oratio* 4)。その中でこの人はローマで銀行家として大成功していたとキケロは話しているので、銀行家は決して軽蔑された職ではないと判断できよう。貸借だけでなく、銀行家は不動産売買の仲介もしていた (*Pro A. Caecina oratio* 6)。

9) ローマ帝国の領土内にはローマと同盟を結び、自立的な政治を行った地方の支配者が沢山いた (Creighton 2008:51-2参照)。

魚保存加工業

地中海は浅堆や暗礁が少ないため、魚も大西洋と比べ少なく、漁業の規模もあまり大きくない (Ambjörnsson 1997:15; Sallares 2013:15)。それでも、地中海の何カ所かで魚の大群が季節的に移動する。これらの場所では短期間に大量の魚が獲られ、それは腐るまで地元で全量を消費できない程であった。そのため保存用の加工が行われ、年中の消費が可能となり、生産地外への輸出もできた (Wilson 2006:527, 534)。

魚はソースやペーストになるまで発酵させた。産地によって発酵時間の長さ (1～6ヶ月) や発酵の時の温度、魚の種類 (鰯、鯖、鱈、鮐、カキ、ウニなど) や鮮度、塩分 (1/8～1/2) 又は味付けなど様々な種類のソースがあった (Alcock 2011:268-9)。最も高級なソースはガルム (*garum*) であった。大プリニウスが説明するように最も好まれた魚ソースはスペイン産 (南東スペインのカルタヘナ産) の主に鯖の血と内臓で作られたガルムであった (*Naturalis historia* 31.43; Morley 2002:148 参照)。当時の暴飲暴食を咎めるセネカによれば、ガルムは非常に高価なのに、悪い魚 (*malorum piscium*) の血から作られ、横隔膜を溶かすほど塩辛いものであった (*Epistulae ad Lucilium* 95)。

ガルムは高級な種類のソースだが、様々な魚から作られていたリクアメン (*liquamen*) は最も多く使われ、特に料理で塩の代わりに利用されていた (Alcock 2011:269; Dalby 2000:102, 195)¹⁰⁾。イタリアでも生産され、ストラボン (紀元前 64～後約 24 年, Dueck 2011:1-2) によれば、イタリア半島南西部のヴェーリア市はその生産地の一つである。この土地は不毛地帯であったため、市民は魚ソースを作っていた (*Geographica* 6.1.1)。ラテン語で *De re coquinaria* というレシピ集がある。伝統に、紀元後 1 世紀のアピキウスに編集された書物であるが、ラテン語自体は 3～4 世紀に由来するので、この頃に作成されたと思われ、編集者の名前は知られていない (Flower と Rosenbaum 1974:12-3)。 *De re coquinaria* の 478 類のレシピのほぼ全てはリクアメンを利用している¹¹⁾。中流階級にとってリクアメンは高級な珍品ではなく、手軽に利用できる食材であったのだろう。

魚の塩漬けもあった。これはサルサメントゥム (*salsamentum*) と言うが、この言葉は塩で漬けられた多くの食材を指すと大プリニウスは述べている (*Naturalis historia* 32.9)。幾つかのサルサメントゥムは薬としても利用されていた (*Naturalis historia* 32.26, 34 参照)¹²⁾。サルディニア島の名前の由来は鰯であるにもかかわらず、漁業に古い歴史があった南西スペインのカディス市で作られた塩漬け鰯が最も好まれ、その多くはイタリアへ輸出された (Dalby 2000:112; Lomas Salomonte 2005:87)。サルサメントゥムを造った後に残っている液体 (ムリア, *muria*) は下流階級に魚ソース、つまり塩の代わりに利用されていたという (Alcock 2011:269)。

この産業の最盛期は紀元後 1～3 世紀で、大量のソースや塩漬けを生産するため保存加工工場が建てられていた。北アフリカや (大西洋側になるが) 北西フランスのブルターニュ地方の

10) 作り方は *Geoponika* 20.46 に記載されている。まず、魚の内臓と小魚を塩に漬け、大きな容器に入れる。しばしばかき混ぜる間に太陽の下で発酵させる。そしてできた後、細かく編んだ籠を容器の真ん中に差し込む。これでソースは籠の網をゆっくり通り、籠の中に入る。最後に籠からソース、つまりリクアメンを採取する。 *Geoponika* は 10 世紀に編集されたが、内容は 4 世紀に遡るという (Dalby 2011:9-10)。

11) リクアメンが普及していたことを示すエピソードがある。コルメツラによれば、まだ飼慣らされていない雄牛の口蓋に塩をすり付け、リクアメンに漬けられた丸パンを食べさせ、ワインを飲ませると四日間で飼主慣れるようになるという (*De re rustica* 6.2)。

12) コルメツラはまた別の用途を述べる。サルサメントゥムは養殖用の魚、特に扁平な体の魚類 (「皿型の魚」と記している) にとって最適な餌になっていた (*De re rustica* 8.12)。

沿岸にこのような巨大な工場跡があり、1カ所で100万立方メートル程のソースや塩漬けが作られた(Kron 2013:169-70; Wilson 2006:533-4)。このような工場を建て、営むには大きな投資が必要だった。儲けが出るまで年月がかかったにもかかわらず、将来の利益を目論み、怯えず大きな財産を注ぎ込んだ企業家の原動力をみることができる。その上に、ローマ帝国の経済にとって大切なことはこのような産業からの影響である。魚工場にとって他の産業からの協力は欠かせなかった。魚を釣る漁師は無論だが、塩を生産する業者やアンフォラという焼き物の容器を作る業者、そして生産された魚ソースや塩漬け魚をマーケットまで運ぶ運送業者も必要だった(Bowman と Wilson 2013:27-8 参照)。

ガラス製造業

ガラスは元々生産に手間がかかる高級品だったが、宙吹きができた紀元前1世紀から僅か2〜3分でガラスの容器が製作できるようになり、直ちに値段が下がり、生産量が増えた(Whitehouse 2012:11; Harden 1987:87-9)。ストラボンによれば、ローマでガラスの容器が1枚の銅貨で売られていた(*Geographica* 16.2.25)。この新しい技術は地中海の東端のシリアで生まれたと思われる(藤井 2009:15-6; 谷一 2007:89)。下流階級が使用していた安い焼き物と上流階級が使っていた高級な金属製テーブルウェアの間にガラス製品にとって開き(ニッチ)があった。銅などの金属で作られたコップには臭気が付きやすいが、ガラスには付かないという長所もあった(藤井 2009:20)。ホラティウス(紀元前65〜8年, Rudd 2004:1,9)はガラスの透明さと輝きを称えるが(*Carmina* 1.18, 3.13), 大プリニウスによれば完全な透明のガラスは最も高級だった(*Naturalis historia* 36.67)。ガラスの材料の一つである砂には不純物が付いているので、多くのガラスに薄い色(ブルー、青緑、褐、赤)が付いている(Harden 1987:95-9 参照)。

ローマのガラスを作るには3つの原料が必要である。(1) 二酸化ケイ素(SiO_2)¹³⁾, (2) 炭酸ナトリウム(Na_2CO_3)¹⁴⁾, (3) カルシウム(Ca)の3つである¹⁵⁾。ガラス製造業で最も大量に使われている原料は砂なので、それに適した砂のある場所へエジプトからナトロンを輸送し、近隣沿岸の貝殻を集める方法が一般的だったと思われる(Wilson 2013b:141 参照)。これらの

13) 二酸化ケイ素は石英の多い砂にあり(Brems他 2012:2898), 大プリニウスによればベルス(Belus)川の河口にある砂が使われていた(*Naturalis historia* 36.65)。ストラボンもこの場所(現代の西北イスラエル)に触れている(*Geographica* 16.2.25)。この砂はナイル川から流れてくるので、レバントの沿岸の何か所からガラス生産に適した砂を掘り出されたと思われる(Brems他 2012:2898; DegryseとSchneider 2008:1997)。西の地中海でもガラス生産が行われたが、ここの砂はサハラ砂漠から吹き飛んだ物であった(DegryseとSchneider 2008:1997)。大プリニウスはベルス川の他、西イタリア半島のヴォルトゥヌス(Volturnus)川の河口にも言及している(*Naturalis historia* 36.66)。この砂をそのまま使うと、多く含まれている不純物の影響でガラスを作れないが、大プリニウスが書いている通り、砂を白で挽いてから水で洗うならば、薄いブルー色のガラスの生産は可能である(Silvestri他 2006:420-7)。

14) 当時の窯は石英が溶ける1710度の高温まで達さなかったが、炭酸ナトリウムの混入によって融点は約1000度に下がった(藤井 2009:31)。融点を下げるため、2つの使用可能な原料があった。以前より植物の灰が使われていたが(Shortland他 2006:522-3), 紀元前最後の千年期の初頭からはナトロンが利用され始めていた。ナトロンの主な供給源はエジプトのアレクサンドリアの西南に位置するワジ・ナトロン(Wadi Natron, 「ナトロンの涸れ川」)にあった(Wilson 2013b:140-1)。大プリニウスはエジプトでのもう一つの原料地メンフィスを挙げているが、メンフィスのナトロンは低質だった(*Naturalis historia* 31.46)。

15) ガラスは風化しやすい素材だが、カルシウムの追加によって強くなる。カルシウムは石灰石にもあるが、ローマ人は貝殻を利用したと思われる(WedepholとBaumann 2000:130), 大プリニウスも貝殻の利用を述べている(*Naturalis historia* 36.66)。

3つの原料(砂, ナトロン, 貝殻)からガラス原料塊が作られ, そしてまた別の工房で原料塊からガラス製品の生産が行われる方法が普通だった。多くの原料塊はシリアやパレスチナといった地中海の東岸地域で生産されたが(Wilson 2013b:141; 藤井 2009:36-7), ローマ帝国西部でも作られた。例えばブリタンニアやゲルマニア・スペリオルである(Jackson, C. 2005: 765-8; Wedephol と Baumann 2000:132)¹⁶⁾。

高級品のガラス製品は特別な芸術家によって製作された。その多くはローマ市内の工房で作られていたと思われるが(Whitehouse 2012:32), アレクサンドリアの職人は様々な種類のガラスを作っていたとアテナイオス(紀元後1世紀後半, McClure 2003:1)が語っているので(*Deipnosophistae* 11.784), ここでも多くの芸術家が工房を持っていたに違いない。

ガラス製造業にも魚保存加工業と同様, 大きな投資が必要であり, 原料塊の生産には大きな登り窯や多くの燃料と原料が必要だった。そして, ガラス工房を運営するため原料塊を購入するだけでなく, 工房を建てて, 職人を雇い, 教育を施す必要もあった。従って, ここからも将来の利益を計画し, 投資する企業家の原動力が窺える。

ガラス製造業のためには多くの運送業の発展も促された。ナトロンはエジプトから主にレバンテに運ばれ, 原料塊はレバンテからローマやアレクサンドリアに限らずローマ帝国の様々な地方にあったガラス工房に送られ, そして最後に生産後のガラス製品はマーケットへ運ばれた。さらに, ガラス製造業は帝国内の消費量を増やすのにも貢献した。普通の土器より高級感のあるガラス商品を望んでいた消費者は焼き物とガラス両方の品を購入していたからだ。古代ローマのガラス製品は器壁が薄く割れやすいので(小寺 2012:90 参照), ガラス製品の使用によって消費が増え, 生産量が高まったと言える。

農業, 貸借, 魚保存加工業, ガラス製造業の分野ではローマ人は利益を得, 高めるために様々な方法で奮闘し, 色々な工夫を実行した。ローマ帝国の人々に自分の富, 資産を増やす強い原動力があったことは明らかである。

2-2. 資本

ローマ帝国の資本は基本的に2つの形で成されていた, (1) 硬貨と(2) 貸借。貸借は2-1-2で既述したように, ローンと信用貸しの二種類があったが, 今節では硬貨を見よう。

紀元前1世紀に金の硬貨が鋳造され始めたと思われる(Rodewald 1976:6-8 参照)。金貨は本来の銀貨より価値が高く, 不動産売買や長距離貿易に関わっている費用(造船, 関税など)の大きな財務取引を可能にした。新しい金貨の鋳造はローマ帝国の経済が成長してきたことを示している(Howgego 1992:11 参照)。アウグストゥス皇帝は硬貨を改定し, 銅・黄銅・銀・金の硬貨ができた¹⁷⁾。最も価値の高い金貨(アウレウス=*aureus*)は最も価値の低い銅貨(クオドランス=*quadrans*)より1600倍の価値があり, 幅広い取引が可能になった(Lo Cascio 2013: 628-9)¹⁸⁾。

16) 本稿はグレートブリテン島を「ブリタンニア」、ローマ帝国は支配したブリタンニアを「ブリタンニア」とする。「ブリタンニア」はおよそ現代のイギリスとウェールズ地域に符合する。

17) ローマ帝国の中央政府は鋳造に使われた金属(銅・鉛・銀・金)の採鉱をコントロールしただけでなく, 自らも採鉱を行っていた(Wilson 2013b:133; Howgego 1992:8-9; Ponting 2013:274-6)。大プリニウスが説明するように, ローマ人は銀鉱から銀を抽出するとき鉛を利用していた(*Naturalis historia* 33.31)。この鉛が空中に排出され, 南風に乗って北欧に運ばれ, 現在, 湖や沼地の底に残っている。分析によれば, 地中海で行われた銀の鉱業は紀元前2世紀～後3世紀にピークに達したとされる(Renberg他 2000: 151-3)。

ローマが鑄造した硬貨は純度が高いため、帝国の各地で通貨として認められた (Rodewald 1976:18-9)¹⁹⁾。これによって、ローマ帝国の各地に一つの貨幣制度が広がり、帝国内の貿易や経済の発展を後押しした (Bowman と Wilson 2013:22 参照)。

言うまでもなく、長距離貿易を行うためには硬貨は欠かせない道具の1つである。売買のために限らず途中の様々なコスト (船の修繕、乗組員の給料と食糧、港の料金、荷役動物の代金と乗り手の賃金など) を賄う必要もあったためである。これらの取引をするのに硬貨は必要だったが、上記のようにローマ帝国が用意していた硬貨で様々な財務取引が可能になったことは明らかである。

2-3. 購買力

国民総生産からローマ帝国の購買力を指定する研究がある。この試算によれば紀元後2世紀中頃のローマ帝国の国民総生産はHS 90億~210億であった (Scheidel と Friesen 2009:362-6)²⁰⁾。ローマ帝国の硬貨の合計価値の試算も容易ではないが²¹⁾、年間の国民総生産と同様な額と推定される (Harris 2006:21)。

下流階級の収入試算も困難だが、HS 150~250の年収が平均とされる。当時のローマ帝国の人口は4400~6000万人だったとされる。下流階級はその人口の9割弱で、国民総生産の6割弱を占めた。中流階級 (人口の1割弱) は国民総生産の2割弱、上流階級である上流階級 (人口の1.5%) もその2割弱を占めたと思われる (国家は国民総生産の僅か5%しか消費しなかった) (Kehoe 2013b:114-5; Scheidel と Friesen 2009:62)。国家のシェアより4倍の金銭を消費した中流階級は多くの輸入品を購入し、貿易にとって大切な消費者だった (Scheidel と Friesen 2009:88-9)。社会的地位を維持するため大金を尽くし、財宝を陳列し、高価な消費ができた上流階級の人口は人数少ないが、中流階級と同様、国家より4倍の金銭を費やした (Rosenstein 2008:24 参照)。

下流階級は生きるためにほぼ全ての金銭を使ったろうが、中流階級は金銭の大部分をより良い生活 (肉、リクアメン、胡椒、上質土器、ガラス製品など) のために使っていた (Scheidel と Friesen 2009:89 参照)。上流階級の多くの消費は贈り物 (Creighton 2008:80)、公私ともに建造 (Zanker 1990:65)²¹⁾、贅沢品のためだった²²⁾。

18) 多くの皇帝を酷評するスエトニウスによれば、硬貨に熱中したカリグラ皇帝 (紀元後12~41年, Barrett 1990:xi-iv) は市民から得たアウレウスの中で転げ回っていた (*C. Caligula* 42)。クラウディウス皇帝は勝利した剣闘士に無作法で左手をトガから出し、アウレウスを与えた (*Divus Claudius* 21)。支援者が必要であったオト皇帝は食事のとき衛兵の各員にアウレウスを与えた (*Otho* 4)。こうした批判により、アウレウスという最も価値の高い硬貨でさえローマの一般社会の中で流通していたことが窺える。

19) 帝国西部は特有の鑄造をやめたが、東部にある幾つかの都市はまだ自らの硬貨鑄造を続けていた。これらの「地方硬貨」は主に価値の低いものだった上に (Bang 2011:181-2)、場合によってこれらの硬貨はローマかアレクサンドリアで鑄造されたものであった (Howgego 1994:16)。それらの都市で地方の硬貨とローマの硬貨が並行的に使われ始め、同じ貨幣制度に入った。

20) その方法はまず帝国の人口を試算し、そして生命を保つための最小限のカロリー (穀物量) を概算する。次に穀物の値段を見積もる。そして、最小限の消費にとどまらず、下流階級よりも消費が多い中流・上流階級の人口とその消費量を推定するというものである。

21) 上流階級が社会的地位を示す代表的な場所の1つは劇場であった。上流階級は住んでいる町及び自分の地位を高めるため、劇場を建てさせた (ポンペイウス劇場はその最も有名な例の1つである, Zanker 1990:20, 44参照)。紀元前1世紀の半ばまでは石で作られた劇場は禁じられていたが (Green 2010:120)、この後は多くの劇場が建てられ、ローマ帝国のほぼ全ての町に広がった (Lomas Salmonte 2005:140)。

軍や道路制度などの莫大な費用を賄う中央政府より国民の方がほぼ 20 倍の金銭を使っていたので、大変力強い購買力があつたに違いない。その国民総生産の 2 割を占めていた中流階級はより良い生活を送るのに様々な輸入品を消費した。同様の 2 割を占めていた上流階級は多くの贅沢品を消費した上に、建造や寄付を行ったため、貿易にとどまらず広くローマの経済発展を後押しした。

2-4. 市場

ローマ帝国には多くの市場があつたが、これらの市場は帝国の全ての市場と相互的に関係があつたか意見が分かれる。相互的なマーケットが存在した場合は帝国内の全ての市場で同じ（輸送コストを除き）商品価格になる筈だが（Belshaw 1965:7 参照）、それを確認することはできない²³⁾。商品や情報を相互的に交換するマーケットの有無に関わらず市場は小さな集落から大きな都市まであつた。種類も多かった（Frayn 1993:1-34）²⁴⁾。働き手がたくさん住んでいたラティフンディウムにも市場が形成された（Frayn 1993:159; Kehoe 2013b:119-20 参照）。軍人が生活した要塞の横にも市場はできた（McLaughlin 2010:172; Morley 2013:575）。例えばブリタンニアの要塞の塙外には集落が形成された。これらの集落で要塞に住んでいた兵士は月給を費やし、市場が形成された（Alcock 2011:115, 144）。

ローマ帝国に活気のある商業や貿易が実在したことは上記の多種の市場が証明している。

2-5. 小結（1）

ローマ帝国の人口の僅か 1.5 パーセントを占めた上流階級は社会的地位を保ち、裕福さを上流階級同士及び市民に見せるため多くの金額を費やした。上流階級は絶えず資産を増やす必要

理想的な劇場の作りを説明するウィトルウィウス（紀元前90年代～20年代, Tavernor 2009:xiv）によれば、元老院議員が最も前の席に座るよう建てられた（*De architectura* 5.6.2）。地方の劇場でも地位の高い市民は前の席に座ることができ、独特な色の服を着用した（Creighton 2008:80）。劇場は社会的地位を示す舞台であつた。またその建造のため多くの働き手が雇われ（Morley 2002:5-6; Kehoe 2013b:123）、様々な材料が輸入されたので（Peacock他1994:229; Jackson, R. 2000:48-51参照）、経済や貿易の発展に一役買っていた。

22) タキトゥス（紀元後55～117年, Svalenius 2003:5）*Annales* 3.52-5やセネカ*Epistulae ad Lucilium* 95は贅沢品の消費を述べる。

23) 全帝国内の穀物の値段は同じであること（Temin 2013a:39-40; Temin 2013b:47-54）、ローマ軍の兵士の月給はどここの属州に配属されても同じであることや銀と金の交換比率が全ての属州で12対1であること（Rathbone 2013:310, 321）から、市場は相互的に商品や情報をやりとりしていたという考えがある。これに対して、冬季の荒い気候は輸送や情報交換を妨害すること（Howgego 1992:27）、陸上の輸送コストは高すぎたので、沿岸から離れた地域の市場はマーケットに含まれないことや穀物を一年保管できる農家は少なかったこと（Erdkamp 2009:157-60; 198-202）などの反論もある。

24) 7 タイプを列举すると次のようになる。（1）*nundinae*は8日間に1回ある市場で、地方の農家は農作物を売り、下流・中流階級は買い物をした（キケロ, *De lege agraria* 2.33; 大プリニウス, *Naturalis historia* 18.3参照）。（2）*mercatus*は長期間街の1カ所で開かれる市場で、皇帝を含め金持ちの人々も娯楽のために訪れた場所だった（スエトニウス, Nero 28参照）。（3）*conventus*は*mercatus*と同じような市場だが、地方で開かれた。（4）*macellum*は町の中心地である*forum*で耐久性のある建物で連続的に行われ、上質品が多く、中流及び上流階級のための市場だった。（5）*emporion*は問屋が卸業を行った市場であつた。（6）*forum*も本来は市場の意味であり、その後「市場のある町」の意味に転化し（キケロ, *Pro A. Cluentio Habito oratio* 14）、また多くの専門市場を指すこともあつた。例えば魚の市場（*piscatorium forum*）（コルメッラ, *De re rustica* 8.17）。（7）市場ではないが、町にある様々な店やサービス業を指す*taberna*もあつた。例えば医院用の*taberna*（キケロ, *Pro A. Cluentio Habito oratio* 63）。

があり、帝国全体の資本増加の原動力となった。

上流階級は農地を保有し、成長していた都市の市場でより大きな利益を得ようと、紀元前2世紀には都市の近くにウィラを作り始めた。更に生産量を増やすため、紀元後1世紀にはウィラに代わり、ラティフンディウムという更に広い農場を作り始め、より多くの奴隷や借地人を働かせた。生産量を増やすため肥料、輪作、異種交配なども試みられる。

資産を増やす方法として起業家に融資することや直接的にプロジェクトに資金投入することも行われた。またローンを実行する多くの仲介者や仲買人の存在もあった。プロジェクトの1つは長距離貿易だが、その他様々な産業もある。例えば魚保存加工業やガラス製造業はその例であり、それぞれの業界はローマ帝国の経済を支えていた。

上流階級だけではなく、中流階級も大きな購買力があつた。下流階級と異なり必要品だけではなく、よりよい生活のため、そして自らの地位は下級階級とは異なるという、自分なりのアイデンティティを形成するため様々な商品を購入した。上述のリクアメンやガラス製品はその商品の例である。

長距離貿易にとって硬貨は必要な道具の1つであるが、ローマ帝国には様々な取引を可能にした貨幣制度があり、多くの商取引には硬貨が使われた。ローマ帝国に様々な形の市場があつた。都市は勿論だが、より小さな町や集落にも、多数の労働者が生活していたラティフンディウムにも、そして陸軍の要塞の横にもあり、それは帝国内の躍動的な経済力を示す。

このように、ローマ帝国は長距離貿易を支える経済的条件を満たしていたのである。

3. ローマ帝国の運輸

長距離貿易の実現には購買力や経済力は基本的な条件だが、運送技術もあるレベルまで達していることが必要である。本稿が探っている北イングランドのウィンドランダの胡椒は、西インド洋、紅海、地中海、イギリス海峡という4つの海を越えた上、エジプトの東砂漠を通り、ガリア（現在のフランスとベルギー）とブリタンニアの内陸を通るなど、様々な運送技術を要した。南インドから北イングランドまで商品を運ぶ技術が2000年前のローマ帝国に本当にあつたのか、探ることとしたい。

3-1. 海上運送

先ずローマ帝国の穀（ハブ）である地中海の航海を見てから、南インドと繋がっている紅海・西インド洋のルートとイギリス海峡の渡しを検討しよう。

3-1-1. 地中海の海運

紀元前2世紀から地中海の貿易はローマ帝国のコントロールに収められていた²⁵⁾。地中海貿

25) 地中海の東岸を本拠にしていたフェニキア人が紀元前9世紀から金属を探しに地中海を越え、大西洋まで入ったことは周知の事実である（Aubet 2001:31-60; Roldán Hervás 2012:106-9）。その後は多くのギリシアの都市国家も地中海と黒海の廻航によってネットワークを形成した（Malkin 2011:50-64; Malkin 2004:359-64）。フェニキア人とギリシア人は幾つかの貿易中心点で商品の交換を行っていたため（Lomas Salmonte 2005:34）、これらのネットワークは1つになり、地中海全域が結ばれていた。紀元前6世紀のフェニキア文明の没落後、カルタゴは元の母市であつたティルスが西地中海に持っていた植民地（貿易拠点）を引き継ぎ（Aubet 2001:343）、貿易はカルタゴの経済の基礎となった（Lancel 1997:

易を展開させるため先ず航海術の向上が欠かせなかった²⁶⁾。

地中海の沿岸には古くから多くの港があった。本稿の対象となる紀元後1～2世紀にはナポリの西にあるポツツオーリからナイル川の西三角州にあるアレクサンドリアまで最も多くの貨物船が往来していた²⁷⁾。このルートでイタリア（ポツツオーリ）～エジプト（アレクサンドリア）の航海は9日間で済んだが（大プリニウス, *Naturalis historia* 19.1）、イタリアに戻る時には向かい風になり、岸沿いに巡航行し、2ヶ月もかかったと思われる（Casson 1974:151-2 参照）²⁸⁾。大カトー（紀元前234～149年, Ash 1935:ix）の演説によれば（もし彼が嘘をついていないならば）北アフリカのカルタゴで採れたイチジクを翌日にローマで食べられた（大プリニウス, *Naturalis historia* 15.20）。地中海は5月から10月にかけては航海しやすい海だが（Erdkamp 2009:184）、冬季は嵐が多く、渡海は危険なので（Adams 2013:225）、岸沿いに進航し、そのため旅は夏季より長い時間がかかった²⁹⁾。

地中海では多くの難船が発見されている³⁰⁾。ギリシア人は船体の板の縁の近くに孔を開けて、縄を通し、横の板と縫い合わせる方法を行った（Beltrame と Gaddi 2013:297-9 参照）。ローマ時代に入ると板の縁をジグソーパズルのように切り抜く（ほぞ・ほぞ穴）方法が行われ、板と板の接合がもっとしっかり固定された。これによって、船体は強い圧力に耐えられるようになり、例えばアンフォラなどの重い貨物を乗せられるようになった（Robinson と Wilson 2011:7-8）。大抵の貨物船は積載量60トン以下の船だったが、5～10%は100トン以上で、積載量600～1000トンの貨物船もあった（Houston 1988:554-60; Wilson 2013a:228）。100トン以上の船は紀元前1世紀～後3世紀の間にしか使われていなかった（Parker, A. 1992:89）。これはローマ帝国の経済的な最盛期に符合し、本稿が取り上げている紀元後1～2世紀の経済的な勢いを示している。

帆は麻で織られた（大プリニウス, *Naturalis historia* 19.1; Whitewright 2007:289 参照）。帆は基本的に二種類あり、横帆は追い風に適する大型の船で使われ、逆風に適する縦帆は小型の船にしか利用できなかった（Polzer 2008:241-7）。

121) 地中海貿易のコントロールを目指したローマ帝国は紀元前3世紀からカルタゴと3度も戦い、紀元前2世紀の半ばにカルタゴと東地中海の大きな貿易パワーであったコリントも壊滅したが（コリント市の足跡も残らなかったほど全壊させたとキケロは自負し、記述している、キケロ, *De lege agraria* 2.32）、アッピアノス（約紀元後95～165年, White 1912:vii）が語っているよう両都市はローマ支配下で再建された（*Historia romana* 8.1.20; Smith 2009:74-6 参照）。

26) 途中で入港せず直接海を渡るために、天文学、算術、幾何学が使われた。海図ではないが航海を容易にするガイドブック（*periplus*）もあった（Dueck 2011:40, 53）。その一冊の*periplus*は「*Periplus Maris Erythraei*」と言い（「エリユトウラー海案内記」として邦訳される）、インド洋の貿易を理解する貴重な資料になっている（下記の3-1-2 参照）。

27) アレクサンドリアの輸出量は輸入量より大きいとストラボン是指摘している（*Geographica* 17.1.7）。

28) 例えばパウロ（紀元後約1～62年, Pollock 2012:16, 301）はこのルートでレバントからイタリア行きのアレクサンドリアから発港した船でポツツオーリへ行こうとした（*Acta Apostolorum* 28:11-3; Humphries 1998:207 参照）。

29) 例えばヨセフスは（紀元後37～92・3年, Smallwood 1981:9-13）そうした実情を述べている（*Bellum Judaicum* 3.64, 4.500）。

30) その大半は海底が浅い沿岸周辺で素人のスキューバダイバーによって発見されているが（Parker, A. 1992:89）、最近では深海でも発見例がある（Ballard 他 2000:1592）。

3-1-2. 紅海と西インド洋の海運

「*Periplus Maris Erythraei*」は紀元後1世紀の半ばに名前が知られていない航海経験のあるギリシア系商人によって書かれた(Casson 1989:7-8)。それにはエジプト側の紅海沿岸にある東エジプトのミュオス・ホルモス及び東南エジプトのベレニケの2つの港町が取り上げられている(*Periplus Maris Erythraei* 1; Peacock 1993:229-232; Peacock 2003:426 参照)。また紀元後20年代に(と思われる, Dueck 2011:2)「*Geographica*」(「ギリシア・ローマ世界地誌」という邦訳あり)を書いたストラボンによれば、以前はベレニケの方がよく利用されていたが、現在はミュオス・ホルモスが主な港になっているという(*Geographica* 17.1.45)。その発言の根拠は不明だが、発掘調査の成果によれば紀元後1世紀のベレニケでは盛んに長距離貿易が行われていたことが推測できる(Wendrich 他 2003:53-78; Sidebotham 2011:56-6)³¹⁾。

ベレニケと南インドの貿易の存在を語っている遺物の一つにベレニケのセラピス神殿で見えられた7キログラム以上の胡椒が入っていた土器があり、ミュオス・ホルモスでも多くの胡椒が出土している(Sidebotham 2011: 60, 185)。また、ミュオス・ホルモスの海でカンパニア式ワイン用のアンフォラを運んでいた貨物船も見つけられたことから(McLaughlin 2010:19)、この港がワインの輸出にも利用されていたと推定できよう。

これらのエジプトの港からの出航は7月に行われ(*Periplus Maris Erythraei* 14, 56)、南アラビア半島のムザ(写本のギリシア語のローマ字化はMuzaであり、下記同様表示)やカナ(Kanè)という貿易が盛んな港町を経由しインド洋に入った(*Periplus Maris Erythraei* 21-4, 27-8, 57)。この時期に出港するのは夏季のモンスーンを利用するため、9月には西インドのムジリス(Myziris)及びバカレ(Bakarè)という町に到着した(*Periplus Maris Erythraei* 54-6; Casson 1989, 289-291 参照)。「*Periplus Maris Erythraei*」には渡航日数の記述はなく、大ブリニウス(*Naturalis historia* 6.26)はそれを40日間と記しているが、違う項でアラビアからスリランカまでモンスーンで15日間の漂流した船の話述べているので(*Naturalis historia* 6.24)、一般的に南アラビア半島～南西インドの渡海は20日間前後かかったと推定できる(Casson 1989: 289 参照)³²⁾。

タミルのサンガム文学(詩)はムジリスに到着したローマ商人が金貨などの積み荷を下ろし、胡椒を載せたという場面を描写している³³⁾。浜の前に停泊している大きな船から小舟で金製品を運ぶ姿や、浜には家と同じ高さまで胡椒の袋が積み上げられている様子が描かれている。チェーラ朝のKuttuvan王は訪ねてきたローマの商人に山と海の商品を渡す(*Puṛaṇāṇūru* 343)。詩には山と海から運ばれた商品名についての記述はないが、山からの商品は胡椒だけでなく、緑柱石もあり、海からの商品は真珠だったと思われる(Begley 1983:477)。他の詩集にも同じ

31) ミュオス・ホルモスはナイル川にあるコプトスから180キロ離れているのに対してベレニケまではその倍の370キロがあるので(Jackson, R. 2002:98, 106)、ミュオス・ホルモスの方が便利な港だと思われやすいが、紅海の止むことなく吹く北風、沿岸の暗礁や海賊の活動によって紅海の北向き航海は大きな困難を伴ったのに対し(Hourani 1995:5)、ベレニケは30キロほど東に突き出る半島の南にあるので、当半島の困難な周航を避けたかった帰港中の船長にとってはこの港の方が便利であった(Jackson, R. 2002: 86)。特にエジプトに戻った時の荷物を早く下ろしたかった船主はこの港を利用したと考えられる。

32) 大ブリニウスは「*Periplus Maris Erythraei*」が述べない更に2つのことを取り上げている。ムジリスよりバカレ(ラテン語でBecare)の方が貿易にとってためになる(utilis)港であること。そして、帰航は12月或いは1月の半ばまでに行われることである(*Naturalis historia* 6.26)。

33) 上記のサンガム詩集がいつ編集されたのかについて様々な説があるが(Selby 2008:17-9参照)、紀元後1～2世紀のローマ帝国との貿易を描いているのは間違いないだろう(GurukkalとWhittaker 2001: 338-9; Pillai 1956:21参照)。

内容の詩がある (*Akanāṇūru* 149.7-11)。金に限らずワインを南インドに持ってきたローマ人も見られる (*Puranāṇūru* 56)³⁴⁾。

金製品の金 (*ṛpon*) はローマの金貨であるアウレウスのことであろう。南インドで多くのローマ硬貨が発見され、その多くは銀貨であるが (Ray 2005:86-7), 紀元後1世紀の半ば頃から金貨も多く入っており、高い人気があった (Suresh 2011:225-6)³⁵⁾。またサンガム文学には輸入されたワイン (*iṭṛal*) を好んだタミルの王らも描かれている (例えば前述の *Puranāṇūru* 56)。インドで多くのワインのアンフォラが出土している事実により、地中海からインドへ多量のワインが輸出されていたことは明らかである³⁶⁾。

帰航で利用された冬季のモンスーンは穏やかだが、インドに渡るときに使われた夏季のモンスーンは強烈であったので、丈夫な船が必要だった。ほぞ・ほぞ穴の技術方法を使って造船されたローマ人の船はこの季節風を利用して航海できるほどしっかりした船であった。南インドに渡ったこれらの貨物船は積載量 500 トンの大きな船だと思われる (Casson 1991:9-10)。

文献の記録及び遺物の発見によりローマ支配下のエジプトと南インドとの貿易の存在は明確となり、また紅海・インド洋の航海を可能にした技術があったことも明らかといえよう。

3-1-3. イギリス海峡の海運

南インドまで航海できるローマ人にとって、短い距離のイギリス海峡を渡るのは簡単だと思われるが、ブリタニアはインドと異なり、未知の地である上、そこを渡るには全地域を囲む海 (オーケアノス) を越える必要があった (Braud 2011:12-5)³⁷⁾。

紀元後 43 年にクラウディウス皇帝が侵略に成功する。ブリタニアを侵略したクラウディウス皇帝のローマ軍は先ず南と西イングランドに一致する地域を占領し、その周りにある首長らと同盟を結び、ブリタニア西南部を支配し始めた (Hobbs と Jackson 2010:30-4)。侵略後 20

34) これらの詩でローマ人を指す言葉は「*yavanar*」であり、語源はサンスクリット語の「*yavana*」にあたる。北インドを生活の舞台としていたサンスクリット語圏の人々にとって、この言葉はペルシア経由で北西インドに渡来したギリシア人を指しているが (Tarn 1980:416-417), その後様々な外国人の集団を指すことになったと言われる (Begley 1991:192, 注44)。南インドのタミル地域では「*yavanar*」はエジプト経由で来たローマ人 (多くはギリシア系) に限定して使われていたと思われる (Zvelebil 1956:409参照)。

35) サンガム時代 (紀元前2世紀～後3世紀) のタミル地域で3つの王国と1つのチーフダム (首長が支配する地域) が硬貨を鋳造し、その多くは銅で造られた (Suresh 2011:60-106)。そのため、ローマの商人が持ってきた稀な銀貨と金貨は高い評価を得たろう。

36) このアンフォラの過半はポツォーリの辺りのカンパニア地方に由来するので (Williams 2004:444-50), イタリア～エジプトのルートで運ばれたのだろう。このようなアンフォラの破片はムジリスの推定地であるパッタナム (英名はPattanam) で出土しているが (Shajan他 2004:316-8), 南インドの反対側 (東海岸) のアrikamedu (Arikamedu) 遺跡では数多くが発見されている (Lyding Will 1991:151-3)。このワインは塩分が高く、長期輸送でも悪くならなかったという (Lyding Will 2004:436)。ベレニケで出土したワイン用のアンフォラの一つにタミル語の文字があることから (Sidebotham 2011:74-5), タミルの商人もこのワインに興味があったと考えられる。

37) カエサル (紀元前100～44年, Mellersh 1963:301, 325) の様々な偉業のうち、彼のイギリス海峡を渡る功績は特に優れていたとプルタルコス (紀元後約45～約120年, Clough 2001:xx) は指摘している (*Vitae parallelae: Caesar* 23.2)。侵入は失敗に終わったのに海峡を渡ったことだけでカエサルはローマで20日間にも及ぶ祝賀を催されたと自慢気に述べている (*De Bello Gallico* 4.38)。カエサルの後にアウグストゥス皇帝 (カッシウス・デイオ, 紀元後約150～235年, *Historia Romana* 53.22, 53.25) もカリグラ皇帝 (スエトニウス, *C. Caligula* 46; タキトゥス *De vita Iulii Agricolae* 13) も新たな侵略を計画したが、実現できなかったほど渡りにくい海峡だった。少なくとも、そのイメージがあった。

年も経たない内にロンドンには商人や店舗が多くなり、貿易の中心地になったことは、タキトゥスが語っている上に (Annals 14.33), テムズ川沿いに2キロほどの長い岸壁が見つかることから明らかである (Alcock 2011:280-1)。クラウディウス皇帝前に既にローマの商人は海峡を渡り、貿易を行っていたのではないだろうか (*De Bello Gallico* 4.20-1; Alcock 2011:17; Braud 2011:60)。ストラボンは関税を払っているブリテン商人について述べているので、この交易が一方的ではないことが窺える (*Geographica* 2.5.8, 4.5.1-3)。

以上の地中海、紅海、西インド洋、イギリス海峡の海運で説明したとおり、ローマ人が南インドと北イングランドの間にある4つの海を越える技術を持っていたことを疑う余地はなからう。

3-2. 陸上輸送

海上の輸送より陸上の輸送費は何倍も高いという意見は多い (例えば Fulford 2013:253-4)。25倍 (Morley 2002:68), 50倍 (Bang 2011:133) という声もあるが、この消極的な考えに反対する学者もいる。海上輸送には生産地～港、及び港～消費地を結ぶ陸上輸送も必要だった (Laurence 1998:143 参照)。これが理由でローマと重要な港町であるポッツオーリの間に道路が作られ、それまでは一日かかった旅が今2時間で可能となったとスタティウス (紀元後約50～約96年, Schakleton Bailey 2003:3-4) は賞賛している (*Silvae* 4.3)。アレクサンドリアから多くの貨物船が着港したポッツオーリに多量の胡椒も運ばれたと考えられる。紀元後1世紀のローマで「*horreum piperatarium*」という「胡椒」から名付けられた香辛料の倉庫街があったので (Schmitthenner 1979:95; Warmington 1974:183; Parker, G. 2002:44), この道路でローマへ胡椒が運送されたと推定できる³⁸⁾。

3-2-1. イタリアからブリタニアへ

大陸を越えるには道路より川や運河を利用した輸送の方が効率的なので、よくそうされていた。例えばローマを貫くテーベレ川には多くの河船が往来していたとマルティアリスは描写している (*Epigrammaton* 4.64)。ガリアの河川も商品輸送を担ったとストラボンは指摘している (*Geographica* 4.1.14)。ガリアの地中海沿岸の貿易中心地はローヌ川の河口にあるマルセイユであった (Humphries 1998:221)。ここからガリア内陸を通り、イギリス海峡までほとんど川で輸送できた。リヨンの神殿で発見された碑文にはローヌ川とソーヌ川の輸送業組合について述べられている (Woolf 2003:78-9 参照)。川に限らず、運河もあった (例えばローヌ川の川口の辺に) (Harris 2013:518)。

ブリタニアにも川が多く、またロンドンに限らずチェスターやカーリアンも同様で、内陸の多くの町には河港の設備があった (Alcock 2011:280 参照)。ストラボンによればイギリス海峡を渡るにはフランスの4つの河口からの出航が可能であったが (*Geographica* 4.5.2), 紀元前54年にブリタニアを侵略したカエサルはイティウス港 (現在の西北フランスのブローニュ・シュ

38) 道路の有無によりウィラの価値が変わるとコルメツァが説くように、ウィラまで道路があるならば作物の輸送は安くなり、地主は頻繁にウィリクスをチェックしに来られるので利益もあがる (*De re rustica* 1.2-3)。実際にウィラへ向けて道路を作った地主の行動はキケロの手紙でも確認できる (*Epistulae ad Quintum Fratrem* 3.1)。道路に固い舗装がない場合、車は引きにくくなると小プリニウス (紀元後61・62～110年代前半, Radice 1969:x-iv) が語っていることから (*Epistulae* 2.17), 港へは勿論だが、ウィラへ道を引いた時も丈夫でしっかりした道路を作る必要があった。

ル・メールだと思われる)から出発している (*De Bello Gallico* 5.2)。ローマの陸軍はブリタンニアの占領後すぐに道路網を作り (Davies 2008:10), ここにも多くの商品が輸送されたと思われる (Alcock 2011:279)³⁹⁾。

イタリア (ローマ) からブリタンニアまでの道はローマ→テーベレ川→オスティア→マルセイユ→ローヌ川とソーヌ川, そしてセーヌ川又はモーゼル川→イティウス港→イギリス海峡→テムズ川→ロンドンであることが視える⁴⁰⁾。実際に紀元後 43 年ブリタンニアを訪ねていたクラウディウスはこのルートで移動したと言われている (Webster 2005:104)。

3-2-2. 砂漠を越える

紅海の沿岸に位置するミュオス・ホルモスやバレンジケとナイル川側にあったコプトスの間にエジプトの東砂漠が広がる。西砂漠と異なり, 東は山や石の多い砂漠である (Adams 2007:33; Sidebotham と Zitterkopf 1995:43)。エジプトをローマ帝国が最終的に併合した紀元前 30 年からローマ軍はワジという枯れ川を利用し, 東砂漠に何本かの道路を作った。ワジの石を川辺 (道路沿い) に積み, 道路標識を作ったり, 1～5 キロ毎に信号を送るためだと思われる塔もあり, 20～40 キロ毎に井戸や宿泊設備を持つ駅を建てた (Jackson, R. 2002:98-106; Zitterkopf と Sidebotham 1989:180-3)。ストラボンはコプトス～ミュオス・ホルモスのルートを描写するときに深い井戸付きの駅について述べている (*Geographica* 17.1.45)。また, そのもう一つのルート (コプトス～バレンジケ) について書く大プリニウスは守備隊の設備も言及している (*Naturalis historia* 6.26)。

東砂漠の道路は貿易のためだけではなく, 砂漠内の山々に採石場があったので, 石材の運搬にも利用された (Adams 2007:198-9)。駅, 守備隊, 採石場, 港町で生活していた人々のために多くの商品も運ばれていた (Zitterkopf と Sidebotham 1989:157), これらの道路はよく利用されていたと想像できよう。

3-3. 小結 (2)

このように, 遠く離れた南インドから北イングランドまで商品を運ぶことはただ可能であるというだけではなく, 実際に行われていたことであった。タミルの詩にはムジリスで大量の胡椒を購入したローマ商人が描かれ, バレンジケで何キロもの胡椒が入っていた土器が見つけられ, 紀元後 1 世紀のローマで胡椒の倉庫があったなどの記述によれば, 様々な商品のうち, 胡椒は海のルートでイタリアまで運ばれ, そして恐らくガリアの川とイギリス海峡の水上でブリタンニアへ運ばれたことが推測できる。この史実は文献上と遺跡から確認され, ウィンドランダの書き板に記された胡椒はこの道で運ばれてきた可能性が高い。但し, イギリス海峡からウィンドランダまでのルートははっきりしないが, それでもロンドンの 3 つの発掘地で灰化された胡椒が出土されているので (Cool 2006:64), ロンドン経由と考えられ (Lo Cascio 2013:637 参照), そこから川や道路で北イギリスへ輸送されたのだろう (Alcock 2011:89, 279 参照)。

39) アイルランドやスコットランドのローマ支配に抵抗していた部族らはたびたび沿岸部へ襲撃を行っている (Hobbs と Jackson 2010:49-51 参照)。沿岸の交通は容易で, 多くの貨物船も往来していたと考えられる。

40) 後の時代になるが, 542 年にユスティニアヌス疫病という伝染病がコンスタンチノープルに届いたが, 1 年もかからない内にその疫病がイタリア, ガリア, ブリタンニアにも広がったことは (Sarris 2002:170), これらの地域の交流を暗示していると言えよう。

4. 生産者から消費者まで

貿易が実現されるためには幾つかの条件を満たす必要がある。その大切な条件の一つには生産者～消費者、売り手～買い手、そして輸送業者などにそれぞれ何か得るものがあったのであろう。南インドから北イングランドまで貿易を実行するには様々な民族、集団、組織が関わったが、彼らは実際に何か利益を得たのだろうか。タミルの王ら・詩人・部下・商人、ローマの中央政府・上流階級・中流階級・起業家・商人、そしてブリタンニアのゲルマン系兵士達やケルト系首長らとその部下について順番に検討しよう。

4-1. タミル人

紀元前の最後のミレニアムの後半に南インドは先ず鉄器時代、そしてサンガム（文字のある）時代に入った。この経過により南インドの狩猟採集社会は農耕社会に変わった。由来には通説はないが⁴¹⁾、サンガムのタミル地域は一つの文化ではなく、幾つかの小さな集団が生産によって自らの独特な文化を形成していたという（Abraham 2003:219 参照）。

幾つかの集団のリーダー（首長）は「王」と呼ばれ⁴²⁾、王にとって自分の社会的地位を維持するために戦争で勇気を出すこと（Hart 1999:xviii）、と部下に贈り物を与えることは欠かせない条件だった（Shulman 1968:72）。これらの贈り物を手に入れるため、王や首長らはサンガム文学に描かれてある先進的な国内外の貿易ネットワークを利用し（Nilakanta 1976:139-42 参照）、考古学の成果で立証できる鉄器生産、鉱業などを振興した（Ramachandran 1980:139-40 参照）。戦場で勇気を示し、部下に贈り物を与える王をたたえ、宣伝をする詩人は重要で、互いの関係は密接になっていた（Shulman 1968:63-9）。

サンガム文学の詩からタミル地域の経済は米作（*Kuṟuntokai* 127）、牛の飼育（*Akananūru* 14, 136, 354; *Narriṇai* 179）、酪農（*Kuṟuntokai* 27, 108）を主としていたことが窺える。雄牛は商人の車も引いていた（*Akananūru* 17）。沿岸の人たちは漁業をし（*Narriṇai* 4, 63; *Aiṅkuṟunūru* 192）、竿や網が使われていた（*Paṭṭiṇappālai* 86-9 行）。魚に限らず貝類も捕られ（*Akananūru* 350）、真珠も採取された（*Akananūru* 27）。文学では例えば塩と米の交換など貿易にも触れている（*Narriṇai* 183）。塩商人が多く、の詩に登場する（*Puṟanānūru* 84, 102 など）。塩は大きな陶器の容器で作られた（*Maturaikkāñci* 113, 334 行）。砂糖も作られていた（*Maturaikkāñci* 265 行）。甘いケーキを売っていた商人もいたので（*Maturaikkāñci* 430 行）、砂糖はこのケーキに使われたかもしれない。そして、酒造にも使われていたことが推測できる（*Maturaikkāñci* 266, 428 行参照）。東岸にあるプガル（Pugar）という町を描写する詩では、道路に市場があったこと（*Paṭṭiṇappālai* 175 行）や、王が多く、の産物を手に入れ、これを街の道路に並んでいる倉庫に保管していたこと（*Paṭṭiṇappālai* 133-6 行）、などが述べられる。ムジリスの場合では貨物船は浜の前に投錨したが、プガルに大きな貨物船がそのまま入れる港もあった（*Puṟanānūru* 30）。貿易で高級な家を建てられるほど成功した商人はそれらの住宅に珍しい商品や食糧を保管できたことも書かれて

41) 元々南インドに住んでいた狩猟採集の民族が農耕を学び農業を始めたとする説（Rajan 2011:178-80）、北から農耕民族が入ったとする説の2つの説があり（Selvakumar 2002:95-7）、両者の両立を試みる研究もある（Ramachandran 1980:137）。

42) 4つの王国が共存していたが、その一つはほとんど資料に登場しない（Thapar 2002:229）。

いる (*Maturaikkāñci* 547-51 行)。

タミル人は上述の胡椒、緑柱石、真珠に限らず、象牙、亀甲、サファイアなど多くの商品をローマの商人に売り、そしてローマの商人から硬貨、様々な金属、ガラス、ワイン、珊瑚などを買った (*Periplus Maris Erythraei* 56)。この貿易のお陰で社会の頂上に立っていた王らは部下に贈り物を与え、自分の地位を維持することができた。タミル社会の頂上 (王室) の直下にいた人物 (詩人、戦士、助言者など) はこのように様々な商品を二次的に手に入れた (つまり、直接ローマの商人からではなく王座経由で)。タミル人の商人もこの貿易で利益を得、生計を立てた。多くのタミル人はローマとの貿易で十分な利益を得たので、彼らはこの貿易が続くよう努力していたと思われる⁴³⁾。

以上述べたように、貿易は活況を呈していた。詩人を含め部下に贈り物を与える王らにとって、この貿易は彼らの政権を保つには欠かせない活動だったので、この貿易ネットワークの発展を促すよう努めたことだろう。そして、タミル地域内に限らず海を越えたネットワークにローマの商人が参加し、威信物であるワインなど地中海から運ばれた商品がタミルの王らの手元に入った。南インドに多量のローマの硬貨が発掘されている事実は貿易で利益を得たタミル人が多かったことを示している。

4-2. ローマ人⁴⁴⁾

様々なローマ人がインドとの貿易に関わった。貨物船には商人や水夫が乗っていた。ヨセフスが指摘しているように、水泳ができる水夫は少なくなかったにも関わらず (*Bellum Judaicum* 2.554)、モンスーンを利用し、広い海を渡って船を安全にタミル地域まで誘導できるスキルを持つ船長や舵手は必要だったとコルメツラは強調する (*De re rustica* 序文 4)。また海賊を撃退できる弓の射手も乗っていたと大プリニウスは語っており (*Naturalis historia* 6.26)、サンガム文学に西インド洋の海賊の存在も明示されている (*Puranānūru* 126)。これらのローマ人射手の何人かはタミルの王らに監視員として雇われ、インドに残ったこともあった (*Cilappatikāram* 14)。

南インドにローマの商人が常住したか意見が分かれているが、「*Tabula Peutingeriana*」(「ポイティンガー図」) というローマ時代に (恐らく紀元後 300 年頃, McLaughlin 2010:10-1) 作られた地図には、ムジリスの辺にアウグストゥスの神殿が描かれている (Stern 1991:116)。これはムジリスに住んでいたローマ商人のために建てられた神殿の可能性がある (Tomber 2012:28 参照)。東南岸にあるアリカメドゥ遺跡では生産や貿易の遺構遺物が多く出土し (Wheeler 他 1946 はその研究の始点だと言えよう)、この中にはガム用のアンフォラもみられ (Lyding Will 2004:439)、定住したローマ人を暗示する⁴⁵⁾。定住しなくとも、エジプトからムジリスに到

43) タミル商人がインド洋を渡り、紅海の港町を訪ねていた証拠はないが、推定する研究はある。例えば ミュオス・ホルモスとベレニケで出土された土器破片にタミル文字でタミルの男名が刻まれていることからタミル商人の滞在が推測され、上質のインド製陶器もタミル商人の居住と関係するとの指摘がある (Rajan 2002:88; Tomber 2002:29)。

44) 本稿では「ローマ人」は市民権の有無に関わらず、ローマ帝国内に住んでいる全員を含む。民族区別を示す必要があるとき「○○系ローマ人」とする。

45) アンフォラの再使用 (運ばれた途中でアンフォラの内容が違う品に入れ変えられること) の可能性もあるが、アンフォラはガムを消費したローマ商人が東側のタミル地域に定住していたことを暗示する資料だと論じる研究家が少なくない (Casson 1989:229; Tchernia 2005:238; Suresh 2004:105; Thapar 1992:16-7)。逆に、このガムは自分のステータスを高めようとしたタミル人に食されたとする考えもある (Tomber 2012:150)。

着したローマ人はモンスーンの方向が西南から東北へ変わるまで数ヶ月も南インドに残っていたので、その間にもワインやガラムなどの地中海から運ばれた飲食物を要求していたと考えられる。

紀元後1世紀の半ば頃ムジリスに滞在していたアレクサンドリアの商社の代理人とローマの船主と思われる人物が契約を結んでいる（「*Papyrus Vindob G40822*」）。船主は船に乗せた商品を担保にし、代理人から金銭を借りた。恐らくエジプトまでの輸送費用を賄うために。この契約書の裏面に紅海の港町で当船主と同じ商社のまた違う代理人の間に結ばれたもう一つの契約がある。アレクサンドリアまでの輸送コストを賄うため船主が金銭を借りたものだ（Casson 2010:228-43 参照）。

船主は自分の船に乗らず、舵手に任せることもある（コルメッラ、*De re rustica* 序文 4）。ローマの貨物船は丈夫な船だったが（Casson 1988:150）、力強いモンスーンで運ばれ、大海を渡った多くの船はインドに着いたときに修理が必要だったと思われるので（Sidebotham 2011:213-4 参照）、貨物船には造船職人も乗っていたと考えられる。南インドにあった地元の材料で船の修理を行ったのだろう。紅海の港町で発見されたココナツ繊維から編んだ縄（Sidebotham 2011:226; McLaughlin 2010:142）やインド綿から織った帆（Whitewright 2007:289; Sidebotham 2011:185）はこの理由でエジプトまで届いたと考えられるが、タミルの商人の存在も否定できない。

紅海の港町で多くの人がインドとの貿易とそれに関連した仕事を行っていた。港の運営のため多くの働き手が必要だった。商品を船から下ろしたり、船に積んだりするのに大人数の港湾労働者が使われていた（Erdkamp 2013:252）。港が砂で埋まり、船が入らなくなってしまう職人もいた（Parker, A. 1992:90; Sidebotham 2011:11）。商品の保管に倉庫、町の防衛に守備隊、商人の宿泊に宿屋、市民の飲食に市場・売店・飲食店などが必要だったので、多くの人がこれらの港町で働き生活をしていた。さらにそれらの人々が生活する砂漠と海の境にあった港町までほぼ全ての食材や建築材などを運ぶ必要があった。これらの必要品の上に更に長距離貿易に関わった商品も砂漠を通らざるを得なかったので、荷物運搬用の動物とそれらを扱う人もこのルートを利用した。そして沿岸からナイル川までのルートを盗賊から守り、常に整備する軍人と彼らの動物も欠かせない存在であった。言うまでもなく、この貿易ではエジプトの東砂漠で多くのローマ人が巻き込まれたことになり、生計を立てていた（Adams 2007:214-5; Jackson R. 2002:82-3; Sidebotham 2011:11-3 参照）。

紅海とナイル川の間の道路、駅、井戸、守備隊を整備した中央政府は利益がなければこの巨大なコストを賄わない筈だ。紀元後約90年のコプトスで刻まれた碑文（「*Coptos Tariff*」）によれば、砂漠を渡る者は職により料金を払わされ（McLaughlin 2010:16）、一緒に運ばれた荷物の種類によって更に料金が足されたが⁴⁶⁾、中央政府にとって最も大きな収入を得られた場所はアレクサンドリアであり⁴⁶⁾、ローマ帝国にとって大切な資金源だった⁴⁷⁾。

46) 帝国外に送る品にも、外国から運ばれてきた品にも全て価値の25%の関税が課せられた（Sidebotham 2011:219-20）。その商品の価値はローマで売られるときの値段から計算された（RobinsonとWilson 2011:7）。この関税は紅海の港町ではなくアレクサンドリアで払わされた。大プリニウスによれば、1キロの黒胡椒の値段は約HS 48であった（1リブラ=4デナリウス、*Naturalis historia* 12.14）。インド洋を渡ったローマの貨物船は理論的には500トンの胡椒を積載できたので、アレクサンドリアでHS 600万の関税を払わされたことになる。言うまでもなく、商人にとって大変大きな出費だったので、上述の「*Papyrus Vindob G40822*」で推察できるように彼らはコストを賄うためローンを組んでいた。

47) ストラボンによればミュオス・ホルモスから年間に120隻の貨物船がインドに渡った（*Geographica* 2.

以上ではタミル地域からアレクサンドリアまでのローマ人しか取り上げていないが、アレクサンドリアからポツツオーリ、ローマ、オステティア、マルセイユ、イティウス港、ロンドン経由で北イングランドに至るまで様々なローマ人が商品の輸送や保護、そして販売に関わっていた。

この貿易で膨大な利益を得た商人、商社企業家、そして投資家が存在した。それぞれの社会的地位を保ち、更にその地位を上げるためこの長距離貿易で得た収益を費やした。アレクサンドリアについて書いているディオ・クリュソストモス（紀元後 45～115 年, Swain 2002:1）はこのように大金をかけた上流階級の生活を描写している（*Orationes* 32:36-41）。

4-3. ゲルマン系とケルト系のローマ人

北イングランドを支配し、カレドニア（スコットランド）からの襲撃を撃退するため幾つかの要塞が建てられた（Alcock 2011:63）。その 1 つが紀元後 85 年頃に建造されたウィンドラングである。ウィンドラングに配属されていた兵士はゲルマン系だった。紀元後 90 年代の何年間間はバタヴィア族のゲルマン系兵士がウィンドラングに勤めていたが、それ以外の期間はトゥングリー族のゲルマン系がここに滞在していた（Birely 2009:47-91）⁴⁸⁾。ローマ軍では市民権を持たない者はアウクシリアと言う支援軍に入って、国境の防衛のために使われたので、ゲルマン系ローマ人の兵士はウィンドラングに配属された⁴⁹⁾。

胡椒を購入した兵士はウィンドラングに配属されたトゥングリー族のゲルマン系支援軍の一員だった。「Tab 184」によれば 2 デナリウスの胡椒を購入した。大プリニウスが示したローマの市場で売られていた値段から計算すれば約 160 グラムになるが、ローマから北イングランドの輸送コストを考慮するならば「Tab 184」の胡椒はこれより少ない量を指す筈だ⁵⁰⁾。

紀元前 6 世紀からケルト人はブリタニアに住み始めた。紀元前 2 世紀からゲルマン人の部族も移住し始めたので（Webster 2005:31-3; Alcock 2011:1-4）、ローマ軍が侵入したとき、ケルト人もゲルマン人もブリタニアに暮らしていた。両民族は幾つかの部族に分かれており、ローマ軍と同盟を結ぶ部族と軍事的に敵対した部族があったが、紀元後 1 世紀の後半から多くの部族はローマ支配下で新しい生き方を採用し、ローマ風の町に住み、ローマ的な生活（例えば、

5.12)。黒胡椒より価値の高い商品は多かったが、黒胡椒の値段を基に試算ですれば、これらの船は中央政府の年間予算の 2 割弱を賄っていたと考えられる（試算：国民総生産は HS 200 億。政府はその 5 % を消費する = HS10 億。関税の 1 / 4（25 %）は国庫に納付される。1 隻から得た HS 600 万 x 25 % = HS150 万。HS 150 万 x 120 隻 = 1 億 8 千万。HS 1 億 8 千万 / HS10 億 = 18 %）。この試算には多少の誤差があろうかと思われるが、インドとの貿易が中央政府にとって大切な収入になっていたことは間違いないであろう。

48) タキトウスによれば、ライン川を渡り、ケルト人を追放した初めてのゲルマン人部族はトゥングリー族で（*De origine et situ Germanorum* 2）、大プリニウスの時代にライン川の西岸よりガリアの内陸に住んでいた（*Naturalis historia* 4.17, 31.8）。

49) 胡椒を記す「Tab 184」は V 期と言われる紀元後 120 年～128 年のウィンドラングの要塞が木造であった時代の最後期（その後は石造に建て替えられた）に属する（Birely 2009:107-9）。ちょうどこの時期にローマ軍は北イングランドの東端から西端へハドリアヌスの長城と言われる約 120 キロの長く巨大な防衛システムを作り始めていたので（De la Bédoyère 1998:13-5; Hobbs & Jackson 2010:40-3）、市民権を持って、複雑な建築に携っていたレギオナーリウス（軍団兵）も北イングランドに居た（Birley 2009:60-1; Birley 2011:72 参照）。

50) *De re coquinaria* アピキウスは大半のレシピで胡椒を利用するが、使用量を示すことが少ない。例えば、一匹の野ウサギを煮るには僅か約 3 グラム（リブラの 1 / 24）しか使わないが、食べるときは胡椒が載っている皿に出すので（8.8.12）、「Tab 184」の量が何週間分に合致するのか試算するのは難しい。料理ではなく、ワインに入れたり、薬として使ったりした可能性もある。

公衆浴場に入り、横になりながら食事をしたりなど）を送っていた（Alcock 2011:59）。ブリタニアのケルト首長らはローマの侵入の前からワインを威信物として飲んでいたと思われるが（Ponting 2013:279 参照）、ローマ支配下のケルト系・ゲルマン系は自らの社会的地位を維持するため、ワインを含め、ローマ風の飲食をしたと思われるので（Cool 2006:193-4 参照）、胡椒も多く利用されたと想像できよう⁵¹⁾。

ブリタニアにもローマの長距離貿易から利益を得た人々が多く存在した。カエサルが指摘するように、侵入前のブリタニアと貿易する商人が少なくなかった（*De Bello Gallico* 4.20）。この貿易でローマ中央政府は大量の関税を得たため、ブリタニアを軍事的に占領しない方が良くストラボンは訴えた（*Geographica* 2.5.8, 4.5.3）。侵略後はローマの商品を求めるブリタニア住人が増え、大陸との貿易が増加した。ロンドンのような都市では事情（住民関係、流行など）が絶え間なく変化していたので市民は常に自分の社会的地位を維持する必要がある（Creighton 2008:153-4）。輸入品の消費は尽きることなく行われていた。地方の首長らはローマ支配下のブリタニアで部下に対しての権威を保つためにローマと同盟を結び、ローマの生活様式を活かした（Alcock 2011:179-80）。

4-4. 小結（3）

このように南インド～北イングランドの様々な民族、組織、個人が貿易から利を得ていた。タミルの王らも、ブリタニアの首長らもローマから運ばれた商品を威信物として使っていたことが窺える。カンパニア産のワインを飲んでいたタミルの王らは海の彼方の大国との繋がりを示し、平民から畏敬の目で見られ、権威を得た。ローマ支配下のケルト系とゲルマン系の首長らも庶民の敬意を得、社会の頂上に残るためにローマ式の食生活を送った（例えばワインを飲んだり、胡椒で香料を加えた料理を食べたりしていた）。

ローマ帝国の社会の中でも社会的地位を保つ必要があった。中流階級は下流との差を広げるために土器のコップの代わりにガラス製のグラスから輸入されたワインを飲んだり、塩の代わりにリクアメンで味付けされた料理を食べたりした。一方、上流階級は同階級の他のメンバーとの競争で贅を尽くし、多くの富を尽くした。遠くの地域から運ばれた贅沢品を陳列し、周りに配り、消費することはこの「戦い」の中で欠かせない「戦略」であった。

社会のトップは自分の地位を保つため長距離貿易で得られる品を求めた。このことはタミル地域でも、ブリタニアでも、ローマでも確認することができる。そして、彼らの要求に応じる商人たちの活躍があった。タミルの商人は王ら経由でローマ人が好んでいた緑柱石、真珠、胡椒を調達し貿易ルートに乗せた。ローマ支配下以前のブリタニアの実情は少し未確認だがローマの銀鉱業で使われていた鉛は首長らの経由で輸出されたと考えられる（Ponting 2013:279 参照）。

関税を得るため、ローマ帝国の中央政府もこの貿易を促進させ、港・道路・倉庫などを整備した。ローマ帝国の貿易に多くの働き手が関わり、商人や輸送業に限らず港、倉庫、船などの建造者、警備員、収税吏などたくさんの人がインドとの貿易で生計を立てていた。南インドから北イングランドまで長距離貿易から利益を得た人物は大勢いたのだった。

51) レギオナーリウスの滞在がもたらした需要の影響もあったかもしれないが、ブリタニアのケルト系・ゲルマン系ローマ人の利用が既に普及していたことで北イングランドの市場でゲルマン系のアウクシリアも購入できる胡椒があったと考えられる。

5. 結語

本稿は紀元後1～2世紀の南インド、地中海域を経て北イングランドへと結ばれた貿易ネットワークの全対象を明らかにしようとしたものである。第2節では今までのローマ帝国経済史で注目されてこなかったローマ帝国が長距離貿易を発展させた経済的原動力について述べた。第3節では貿易を可能にする技術がローマ帝国にあったことを確認した。最後の第4節はいままでの研究では取り上げていない課題を巡った。この課題は紀元前1世紀の終わり頃から広大な貿易ネットワークに参加していた民族、集団、個人の動機であり、その中では利益を得る本質的な要素を述べた。

タミルの王らは貿易によって威信物を手に入れられ、部下に贈り物を配り、それによって地位を維持することができた。王らを讃えた詩人も贈り物を得、王と共に部下からの更に高い尊敬を獲得できた。タミル地域の商人は貿易ネットワークの様々な品物を売買し、儲けを得た。ローマ帝国からの金貨がタミルの各地で発見されるのはそのためである。

ローマの中央政府は多額の関税収入を得た。貿易に投資した上流階級はその利益で贅沢品を手に入れ、畏敬の目で見られ、社会的地位を維持し、場合によっては高めもした。ローマの商人に限らず、商社やそれらの代理人、そして運搬業者や港の労働者はこの貿易で生計を立てた。ブリタンニアの首長らはローマ的な生活を送るために欠かせない商品を手に入れ、社会的地位を維持することができた。配属された兵士を含め、一般のケルト系とゲルマン系のローマ人もローマ的で高く評価された生活ができた。

ところで大ブリニウスは、ローマ人が遊びと女性のために国庫から毎年HS 1億も費やしていたと批判し、そして膨大な大金が貿易のルートでインド・中国・アラビアで失われていると書いている (*Naturalis historia* 12.41)。有名な言葉でありながら、本稿で述べてきたように大ブリニウスは間違っていた。遊びや女性のためではなく、社会的地位を絶え間なく維持するためにローマ人は多額の金を費やしていた。その金額の一部は関税として国庫に入ったが、大部分はローマ帝国内で循環し、帝国の経済成長を促したのであって、帝国にとって決して「失われた」お金ではなかった。

本稿は長距離貿易の一面にしか触れておらず、まだ多くの課題が残っている。その1つは概念（アイディア、コンセプト）の広がりである。南インドに滞在していたローマ商人とタミル人の交流によってどんな情報・技術・神話などが交換されていたのか、そしてこの交換によってどのような新しい発想が生まれてきたのかなどを探るのも1つの魅力的な研究テーマだと思う。今後の研究対象とし、成果を示せば幸いである。

参考書

1. 文献

ラテン語・ギリシア語の文献

アテナイオス, *Deipnosophistae*. S. Douglas Olson (英訳). *The learned banqueters*. Cambridge: Harvard University Press. (2009)

アッピアノス, Horace White (英訳). *Roman history*. Cambridge: Harvard University Press. (1912)

- ウィトルウィウス, *De architectura*. Richard Schofield (英訳). *On architecture*. London: Penguin Books.
- カエサル, *De Bello Gallico*. Åke Fridh (スウェーデン語訳). *Kriget i Gallien*. Stockholm: Natur och Kultur. (1963)
- カッシウス・ディオ, *Historia Romana*. Ernest Cary (英訳). *Roman history*. Cambridge: Harvard University Press. (1917)
- キケロ, *De lege agraria*. J. H. Freese (英訳). *On the agrarian law*. Cambridge: Harvard University Press. (1930)
- *Epistulae ad Quintum Fratrem*. Shackelton Bailey (英訳). *Letters to Quintus*. Cambridge: Harvard University Press. (1972)
- *Pro A. Caecina oratio*. H. Grose Hodge (英訳). *Pro Caecina*. Cambridge: Harvard University Press. (1927)
- *Pro A. Cluentio Habito oratio*. H. Grose Hodge (英訳). *Pro Caecina*. Cambridge: Harvard University Press. (1927)
- *Pro Publico Quinctio*. J. H. Freese (英訳). *Pro Quinctio*. Cambridge: Harvard University Press. (1930)
- コルメッラ, *De re rustica*. Harrison Boyd Ash (英訳). *On agriculture*. Cambridge: Harvard University Press. (1941)
- スエトニウス, *C. Caligula*. J. C. Rolfe (英訳). *Life of the Caesars*. Cambridge: Harvard University Press. (1913)
- *Divus Augustus*. J. C. Rolfe (英訳). *Life of the Caesars*. Cambridge: Harvard University Press. (1913)
- *Divus Claudius*. J. C. Rolfe (英訳). *Life of the Caesars*. Cambridge: Harvard University Press. (1913)
- *Nero*. J. C. Rolfe (英訳). *Life of the Caesars*. Cambridge: Harvard University Press. (1913)
- *Otho*. J. C. Rolfe (英訳). *Life of the Caesars*. Cambridge: Harvard University Press. (1913)
- スタティウス, *Silvae*. D. R. Shackleton Bailey (英訳). *Silvae*. Cambridge: Harvard University Press. (2003)
- ストラボン, *Geographica*. Horace Leonard Jones (英訳). *Geography*. Cambridge: Harvard University Press. (1923-32)
- セネカ, *Epistulae ad Lucilium*. Richard M. Gummere (英訳). *Epistles*. Cambridge: Harvard University Press. (1925)
- タキトゥス, *De vita Iulii Agricolae*. M. Hutton と M. Ogilvie (英訳). *Agricola*. Cambridge: Harvard University Press. (1970)
- *Annales*. Ivan Svalenius (スウェーデン語訳). *Annaler*. Sövedalen: Paul Åströms förlag. (2003)
- *Annales*. John Jackson (英訳). *Annals*. Cambridge: Harvard University Press. (1937)
- *De origine et situ Germanorum*. M. Hutton と H. Warmington (英訳). *Germania*. Cambridge: Harvard University Press. (1970)
- ディオ・クリュソストモス, *Orationes*. J. W. Cohoon と H. Lamar Crosby. *Discourses*. Cambridge: Harvard University Press. (1940)
- 大ブリニウス, *Naturalis historia*. H. Rackham (英訳). *Natural history*. Cambridge: Harvard University Press. (1942-63)
- 小ブリニウス, *Epistulae*. Betty Radice (英訳). *Letters and Panegyricus*. Cambridge: Harvard University Press. (1969)
- プルタルコス, *Vitae parallelae: Caesar*. Bernadotte Perrin (英訳). *Lives: Alexander and Caesar*. Cambridge: Harvard University Press. (1919)
- ホラティウス, *Carmina*. Niall Rudd (英訳). *Odes and epodes*. Cambridge: Harvard University Press. (2004)
- マルティアリス, *Epigrammaton*. D. R. Shackleton Bailey (英訳). *Epigrams*. Cambridge: Harvard University Press. (1993)
- ユウェナリス, *Satires*. Susanna Morton Braund (英訳). *Juvenal and Perisus*. Cambridge: Harvard University Press. (2004)
- ヨセフス, *Bellum Judaicum*. G. A. Williamson と E. Mary Smallwood (英訳). *The Jewish war*. London: Penguin Books. (1981)
- 作者不詳, *Acta Apostolorum*. Svenska Bibelsällskapet (スウェーデン語訳). *Bibeln*. Stockholm: Verbum. (2000)
- 作者不詳, *De re coquinaria*. Barbara Flower と Elisabeth Rosenbaum (英訳). *The Roman cookery book: a critical translation of the art of cooking by Apicius for use in the study and the kitchen*. London: Harrap.

(1958)

作者不詳. *Geoponika*. Andrew Dalby (英訳). *Farm work: a modern translation of the Roman and Byzantine farming handbook*. Blackawton: Prospect Books. (2011)

作者不詳. *Periplus Maris Erythraei*. Casson, Lionel (英訳). *The Periplus of the Erythraean Sea*. Princeton: Princeton University Press. (1989)

作者不詳. Tab 184. Alan K. Bowman と J. David Thomas (英訳). 1994. *The Vindolanda writing-tablets (Tabulae Vindolandenses II)*. London: British Museum Press.

タミル語の文献

Akanāṇṭu. C. E. Ramachandran (英訳). *Ahanauru in its historical setting*. Madras: University of Madras. (1974) (詩 14・17・27 のみ)

Cilappatikāram. R. Parthasarathy (英訳). *The tale of an anklet: an epic of South India*. New York: Columbia University Press. (1993)

Kuruntokai. C. Balasubramanian (英訳). A critical study of Kuruntokai. Madras: Narumalarp patippakam. (1991)

Maturaikkāñci. J. V. Chelliah (英訳). *Pattupattu: ten Tamil idylls*. Thanjavur: Tamil University Press. (1985)

Paṭṭiṇappālai. J. V. Chelliah (英訳). *Pattupattu: ten Tamil idylls*. Thanjavur: Tamil University Press. (1985)

Puraṇāṇṭu. George L. Hart と Hank Heifetz (英訳). *The four hundred songs of war and wisdom*. New York: Columbia University Press. (1999)

他のサンガム文献は A. K. Ramanujan (英訳). *Poems of love and war*. New Delhi: Oxford University Press. (1985) より。

2. 研究書

Abraham, Shinu A. 2003. Chera, Chola, Pandya: using archaeological evidence to identify the Tamil kingdoms of early historic South India. *Asian Perspectives* 42(2):207-223.

Adams, Colin. 2013. Transport. Walter Scheidel (編). *The Cambridge companion to the Roman economy*. Cambridge: Cambridge University Press. 218-240. (2012)

——— 2007. *Land transport in Roman Egypt: a study of economics and administration in a Roman province*. Oxford: Oxford University Press.

Alcock, Joan P. 2011. *A brief history of Roman Britain: conquest and civilization*. London: Robinson.

Ambjörnsson, Ronny. 1997. *Människors undran*. Stockholm: Natur och Kultur.

Ash, Harrison Boyd. 1935. *Cato on Agriculture*. Cambridge: Harvard University Press. (1934)

Aubet, Maria Eugenia. 2001. *The Phoenicians and the West*. Cambridge: Cambridge University Press. (1987)

Ballard 他. 2000. (R. D. Ballard, A. M. McCann, D. Yoerger, L. Whitcomb, D. Mindell, J. Oleson, H. Singh, B. Foley, J. Adams, D. Piechota, C. Giangrande.) The discovery of ancient history in the deep sea using advanced deep submergence technology. *Deep-sea research part I: oceanographic research papers* 47 (9):1591-1620.

Bang, Peter Fibiger. 2011. *The Roman bazar: a comparative study of trade and markets in a tributary empire*. Cambridge: Cambridge University Press. (2008)

Barrett, A. Anthony. 1990. *Caligula: the corruption of power*. New Haven: Yale University Press.

Begley, Vimala. 1991. Vimala Begley. Ceramic evidence for pre-Periplus trade on the Indian coasts. Vimala Begley と Richard Daniel De Puma (編). *Rome and India: the ancient sea trade*. Madison: The University of Wisconsin Press. 157-196.

——— 1983. Arikamedu reconsidered. *American journal of archaeology*. 87(4):461-481.

Belshaw, Cybril S. 1965. *Traditional exchange and modern markets*. Englewood Cliffs: Prentice-Hall.

Beltrame と Gaddi. 2013. (Carlo Beltrame と Dario Gaddi.) Fragments of boats from the Canale Anfora of

- Aquileia, Italy, and comparison of sewn-plank ships in the Roman era. *The international journal of nautical archaeology* 42(2):296-304.
- Birley, Anthony. 2011. *Garrison life at Vindolanda: a band of brothers*. Gloucestershire: The History Press. (2002)
- . 2009. *Vindolanda: a Roman frontier fort on Hadrian's wall*. Chalford: Amberley.
- Bowman, Alan K. 2003. *Life and letters on the Roman frontier: Vindolanda and its people*. London: Routledge. (1994)
- Bowman と Thomas. (Alan K. Bowman と J. David Thomas.) 1994. *The Vindolanda writing-tablets (Tabulae Vindolandenses II)*. London: British Museum Press.
- Bowman と Wilson. 2013. (Alan K. Bowman と Andrew Wilson.) Quantifying the Roman economy: integration, growth, decline? Alan Bowman と Andrew Wilson (編). *Quantifying the Roman economy: methods and problems*. Oxford: Oxford University Press. 3-84. (2009)
- Bradley, K. R. 1998. Introduction. *Life of the Caesars*. J. C. Rolfe (訳). Cambridge: Harvard University Press. 1-34.
- Braud, David. 2011. *Ruling Roman Britain: kings, queens, governors and emperors from Julius Caesar to Agricola*. London: Routledge. (1996)
- Brems 他. 2012. (Dieter Brems, Patrick Degryse, Femke Hasendoncks, Domingo Gimeno, Albert Silvestri, Elvira Vassilieva, Seven Luypaers と Johan Honings.) Western Mediterranean sand deposits as a raw material for Roman glass production. *Journal of archaeological science* 39(9):2897-2907.
- Casson, Lionel. 2010. New light on maritime loans: P. Vindob G 40822. Ranabir Chakravarti (編). *Trade in early India*. New Delhi: Oxford University Press. 228-243. (2001)
- . 1991. Ancient naval technology and the route to India. Vimala Begley と Richard Daniel De Puma (編). *Rome and India: the ancient sea trade*. Madison: The University of Wisconsin Press. 8-11.
- . 1989. *The Periplus Maris Erythraei*. Princeton: Princeton University Press.
- . 1988. Rome's maritime trade with the Far East. *The American Neptune: a quarterly journal of maritime history* XLVIII(3):149-153.
- . 1974. *Travel in the ancient world*. London: George Allen & Unwin.
- Cipola, Carlo M. 1994. *Before the Industrial Revolution: European society and economy 1000-1700*. New York: W. W. Norton & Company. (1993)
- Clough, Arthur Hugh. 2001. Preface. Arthur Hugh Clough (編). *Plutarch's lives*, vol 1. New York: The modern library.
- Cool, H. E. M. 2006. *Eating and drinking in Roman Britain*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Creighton, John. 2008. *Britannia: the creation of a Roman province*. London: Routledge. (2006)
- Dalby, Andrew. 2011. *Geoponika. Farm work: a modern translation of the Roman and Byzantine farming handbook*. Blackawton: Prospect Books.
- . 2000. *Empire of pleasures: luxury and indulgence in the Roman world*. London: Routledge.
- Davies, Hugh. 2008. *Roman roads in Britain*. Oxford: Shire.
- Degryse と Schneider. 2008. (P. Degryse と J. Schneider.) Pliny the Elder and Sr-Nd isotopes: tracing the provenance of raw materials for Roman glass production. *Journal of archaeological science* 35(7):1993-2000.
- De la Bédoyère, Guy. 1998. *Hadrian's wall: history and guide*. Stroud: Tempus.
- Dueck, Daniela. 2011. *Strabo of Amasia: a Greek man of letters in Augustan Rome*. London: Routledge. (2000)
- Eck, Werner. 2007. *The age of Augustus*. Malden: Blackwell Publishing. (1998)
- Erdkamp, Paul. 2013. Urbanism. Walter Scheidel (編). *The Cambridge companion to the Roman economy*. Cambridge: Cambridge University Press. 241-265. (2012)
- . 2009. *The grain market in the Roman Empire*. Cambridge: Cambridge University Press. (2005)
- Finley, M. I. 1973. *The ancient economy*. Berkeley: University of California Press. (第2版は1999年)

- Flower と Rosenbaum. 1974. (Barbara Flower と Elisabeth Rosenbaum.) *The Roman cookery book: a critical translation of the art of cooking by Apicius for use in the study and the kitchen*. London: Harrap. (1958)
- Frayn, Joan M. 1993. *Markets and fairs in Roman Italy: their social and economic importance from the second century BC to the third century AD*. Oxford: Oxford University Press.
- 藤井慈子. 2009 年. 『ガラスのなかの古代ローマ：三、四世紀工芸品の図像を読み解く』. 横浜：春風社.
- Fulford, Michael. 2013. Approaches to quantifying Roman Trade: response. Alan Bowman と Andrew Wilson (編). *Quantifying the Roman economy: methods and problems*. Oxford: Oxford University Press. 251-258. (2009)
- Goltz Huzar, Eleanor. 1978. *Mark Anthony: a biography*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Green, J. R. 2010. The theater of Paphos and the theater of Alexandria: some first thoughts. Roy MacLeod (編). *The Library of Alexandria: center of learning in the ancient world*. London: I.B. Tauris. 115-126. (2000)
- Gurukkal と Whittaker. 2001. (Rajan Gurukkal と Dick Whittaker.) In search of Muziris. *Journal of Roman archaeology* 14:334-350.
- Harden, Donald B. 1987. *Glass of the Caesars*. Milan: Olivetti.
- Harris, W. H. 2013. The late Republic. Walter Scheidel, Ian Morris, Richard P. Saller (編). *The Cambridge economic history of the Greco-Roman world*. Cambridge: Cambridge University Press. 511-539. (2007)
- 2006. A revisionist view of Roman money. *The journal of Roman studies* 96:1-24.
- Harrison, Boyd Ash. 1941. Introduction. *On agriculture*. Cambridge: Harvard University Press. xiii-xxv.
- Hart, George. 1999. Introduction. George L. Hart と Hank Heifetz. *The four hundred songs of war and wisdom*. New York: Colombia University Press. xv – xxxvii.
- Hobbs と Jackson. 2010. (Richard Hobbs and Ralph Jackson). *Roman Britain: life at the edge of empire*. London: The British Museum Press.
- Hourani, George F. 1995. *Arab seafaring in the Indian Ocean in ancient and early medieval times*. Princeton: Princeton University Press. (1951)
- Houston, George W. 1988. Ports in perspective: some comparative materials on Roman merchant ships and ports. *American journal of archaeology* 92(4):553-564.
- Howgego, Christopher. 1994. Coin circulation and the integration of the Roman economy. *Journal of Roman archaeology* 7:5-21.
- 1992. The supply and use of money in the Roman world 200 BC to AD 300. *The journal of Roman studies* 82:1-31.
- Humphries, Mark. 1998. Trading gods in northern Italy. Helen Parkins と Christopher Smith (編). *Trade, traders and the ancient city*. Abingdon: Routledge. 203-222.
- Jackson, C. M. 2005. Making colourless glass in the Roman period. *Archaeometry* 47(4):763-780.
- Jackson, Robert B. 2002. *At empire's edge: exploring Rome's Egyptian frontier*. New Haven: Yale University Press.
- Janson, Tore. 2002. Latin: kulturen, historien, språket. Stockholm: Wahlström och Widstrand.
- Kehoe, Dennis P. 2013a. The early Roman empire: production. Walter Scheidel, Ian Morris, Richard P. Saller (編). *The Cambridge economic history of the Greco-Roman world*. Cambridge: Cambridge University Press. 543-569. (2007)
- 2013b. Contract labor. Walter Scheidel (編). *The Cambridge companion to the Roman economy*. Cambridge: Cambridge University Press. 114-130. (2012)
- 小寺智津子. 2012 年. 『ものが語る歴史シリーズ (27)：ガラスが語る古代東アジア』. 東京：同成社.
- Kron, Geoffrey. 2013. Food production. Walter Scheidel (編). 2013. *The Cambridge companion to the Roman economy*. Cambridge: Cambridge University Press. 156-174. (2012)
- Lancel, Serge. 1997. *Carthage: A History*. London: Wiley-Blackwell. (1994)

- Laurence, Ray. 1998. Land transport in Roman Italy: costs, practice and the economy. Helen Parkins と Christopher Smith (編). *Trade, traders and the ancient city*. Abingdon: Routledge. 129-148.
- Lo Cascio, Elio. 2013. The early Roman empire: the state and the economy. Walter Scheidel, Ian Morris, Richard P. Saller (編). *The Cambridge economic history of the Greco-Roman world*. Cambridge: Cambridge University Press. 619-647. (2007)
- Lomas Salmonte, Francisco Javier. 2005. Cádiz en la antigüedad. Ramitro Domínguez (編). *Historia de Cádiz*. Madrid: Silex. 15-145.
- Lyding Will, Elizabeth. 2004. Mediterranean amphoras in India. Jonas Eiring と John Lund (編). *Transport amphorae and trade in the Eastern Mediterranean: acts of the International Colloquium at the Danish Institute at Athens, September 26-29, 2002*. Athens: The Danish Institute at Athens. 433-440.
- . 1991. The Mediterranean shipping amphoras from Arikamedu. Vimala Begley と Richard Daniel De Puma (編). *Rome and India: the ancient sea trade*. Madison: The University of Wisconsin Press. 151-156.
- Malkin, Irad. 2011. *A small Greek world: networks in the ancient Mediterranean*. Oxford: Oxford University Press.
- . 2004. Postcolonial concepts and ancient Greek colonization. *Modern language quarterly* 65 (3): 341-364.
- McClure, Laura K. 2003. *Courtesans at table: gender and Greek literary culture in Athenaeus*. New York: Routledge.
- McLaughlin, Raoul. 2010. *Rome and the distant East*. London: Continuum.
- Mellersh, H. E. L. 1963. Författaren och hans verk. Åke Fridh (訳). *Kriget i Gallien*. Stockholm: Natur och Kultur. 297-329.
- Migeott, Léopold. 2009. *The economy of the Greek cities: from the archaic period to the early Roman Empire*. Berkeley: University of California Press. (2002)
- Miller, J. Innes. 1968. *The spice trade of the Roman empire 29 B.C. to A.D. 641*. Oxford: Oxford University Press.
- Morley, Neville. 2013. The early Roman empire: distribution. Walter Scheidel, Ian Morris, Richard P. Saller (編). *The Cambridge economic history of the Greco-Roman world*. Cambridge: Cambridge University Press. 570-591. (2007)
- . 2002. *Metropolis and hinterland: the city of Rome and the Italian economy 200 B.C. - A.D. 200*. Cambridge: Cambridge University Press. (1996)
- Morton Braund, Susanna. 2004. Introduction. *Juvenal and Perisus*. Cambridge: Harvard University Press. (2004) 1-39.
- Murphy, Trevor. 2004. *Pliny the Elder's Natural history: the empire in the encyclopedia*. Oxford: Oxford University Press.
- Nilakanta, K.A. 1976. *A history of South India: from prehistoric times to the fall of Vijayanagar*. Madras: Oxford University Press. (1955)
- Parker, A. J. 1992. Cargoes, containers and stowage: the ancient Mediterranean. *The international journal of nautical archaeology* 21 (2): 89-100.
- Parker, Grant. 2002. Ex oriente luxuria: Indian commodities and Roman experience. *Journal of the economic and social history of the Orient* 45 (2): 41-95.
- Peacock, David. 2003. The Roman period (30 BC-AD 395). In Ian Shaw (ed). *The Oxford history of ancient Egypt*. Oxford: Oxford University Press. 414-436. (2000)
- . 1993. The site of Myos Hormos: a view from space. *Journal of Roman Archaeology* 6: 226-232.
- Peacock 他. 1994. (D.P.S. Peacock, Olwen Williams-Thorpe, R.S. Thorpe, A.G. Tindle.) Mons Claudianus and the problem of the 'granito del foro': a geological and geochemical approach. *Antiquity* 68: 209-230.
- Pillai, Vaiyapuri. 1956. *History of Tamil language and literature (beginning to 1000 A.D.)*. Madras: New Century Book House.

- Pollock, John. 2012. *The apostle: a life of Paul*. Colorado Springs: David C. Cook. (1969)
- Polzer, Mark E. 2008. Toggles and sails in the ancient world: rigging elements recovered from the Tantura B shipwreck, Israel. *The international journal of nautical archaeology* 37(2):225-252.
- Ponting, Matthew. 2013. Roman silver coinage: mints, metallurgy, and production. Alan Bowman と Andrew Wilson (編). *Quantifying the Roman economy: methods and problems*. Oxford: Oxford University Press. 269-280. (2009)
- Radice, Betty. 1969. *Letters and Panegyricus*. Cambridge: Harvard University Press.
- Rajan, K. 2011. Emergence of early historic trade in peninsular India. Pierre-Yves Manguin, A. Mani, Geoff Wade (編). *Early interactions between South and Southeast Asia: reflections on cross-cultural exchange*. Singapore: ISEAS Publishing. 177-196.
- 2002. Maritime trade in early historic Tamil Nadu. *Man and environment* 27(1):83-98.
- Ramachandran, K. S. 1980. *Archaeology of south India: Tamil Nadu*. Delhi: Sundeep Prakashan.
- Rathbone, Dominic. 2013. Earnings and costs: living standards and the Roman economy (first to third centuries AD). Alan Bowman と Andrew Wilson (編). *Quantifying the Roman economy: methods and problems*. Oxford: Oxford University Press. 299-326. (2009)
- Ray, Himanshu Prabha. 2005. The Yavana presence in ancient India. Marie-Françoise Boussac と Jean-François Salles (編). *Athens, Aden, Arikamedu: essays on the interrelations between India, Arabia and the eastern Mediterranean*. New Delhi: Manohar. 75-95.
- von Reden, Sitta. 2013. Money and Finance. Walter Scheidel (編). *The Cambridge companion to the Roman economy*. Cambridge: Cambridge University Press. 266-286. (2012)
- Reinhardt, Tobias. 2008. Introduction. John Davie (訳). *Dialogues and essays*. Oxford: Oxford University Press. vii-xxvii. (2007)
- Renberg 他. 2000. (Ingemar Renberg, Maja-Lena Brännvall, Richard Bindler, Ove Emteryd.) Atmospheric lead pollution history during four millennia (2000 BC to 2000 AD) in Sweden. *Ambio* 29(3):150-156.
- Robinson と Wilson. 2011. (Damian Robinson と Andrew Wilson.) Introduction: maritime archaeology and the ancient economy. Damian Robinson と Andrew Wilson (編). *Maritime archaeology and ancient trade in the Mediterranean*. Oxford: Oxford Center for Maritime Archaeology. 1-11.
- Rodewald, Cosmo. 1976. *Money in the age of Tiberius*. Manchester: Manchester University Press.
- Roldán Hervás, José Manuel. 2012. *Historia Antigua de España 1: Iberia preromana, Hispania republicana y alto imperial*. Madrid: Universidad Nacional de Educación a Distancia. (2001)
- Rosenstein, Nathan. 2008. Aristocrats and agriculture in the middle and late republic. *The journal of Roman studies* 98:1-26.
- Rudd, Niall. 2004. *Odes and epodes*. Cambridge: Harvard University Press.
- Sallares, Robert. 2013. Ecology. Walter Scheidel, Ian Morris, Richard P. Saller (編). *The Cambridge economic history of the Greco-Roman world*. Cambridge: Cambridge University Press. 15-37. (2007)
- Saller, Richard. 2005. Framing the debate over growth in the ancient economy. J. G. Manning と Ian Morris (編). *The ancient economy: evidence and models*. Stanford: Stanford University Press. 223-238.
- Sarris, Peter. 2002. The Justinianic plague: origins and effects. *Continuity and change* 17:169-182.
- Schakleton Bailey, D. R. 2003. *Silvae*. Cambridge: Harvard University Press.
- 1993. *Epigrams*. Cambridge: Harvard University Press.
- Scheidel と Friesen. 2009. (Walter Scheidel と Steven J. Friesen.) The size of the economy and the distribution of income in the Roman Empire. *The journal of Roman studies* 99:61-91.
- Schmitthenner, Walter. 1979. Rome and India: aspects of universal history during the Principate. *The journal of Roman studies* 69:90-106.
- Selby, Martha Ann. 2008. Dialogues of space, desire, and gender in Tamil *caṅkam* poetry. Martha Ann Selby と Indira Viswanathan Peterson. *Tamil geographies: cultural constructions of space and place in south India*. Albany: State University of New York Press. 17-42.
- Selvakumar, V. 2002. Hunter-gatherer adaptations in Madurai region, Tamil Nadu, India, from c. 10,000 BP to

- c. AD 500. *Asian perspectives* 41 (1) 71-102.
- Shajan 他. 2004. (K. P. Shajan, R. Tomber, V. Selvakumar, P. J. Cherian.) Locating the ancient port of Muziris: fresh findings from Pattanam. *Journal of Roman archaeology* 17:312-320.
- Shortland 他. 2006. (Andrew Shortland, Lukas Schachner, Ian Freestone と Michael Tite.) Natron as a flux in the early vitreous materials industry: sources, beginnings and reasons for decline. *Journal of archaeological science* 33(4):521-530.
- Shulman, David. 1968. *The wisdom of poets: studies in Tamil, Telgu, and Sanskrit*. New Delhi: Oxford University Press.
- Sidebotham, Steven E. 2011. *Berenike and the ancient maritime spice route*. Berkeley: University of California Press.
- Sidebotham と Zitterkopf. 1995. (Steven E. Sidebotham と Ronald E. Zitterkopf.) Routes through the eastern desert of Egypt. *Expedition* 37(2):39-51.
- Silver, Morris. 2009a. Historical otherness, the Roman bazaar, and primitivism: P. F. Bang on the Roman economy. *Journal of Roman archaeology* 22:421-443.
- 2009b. Must frequently performed economic services have distinctive names? a probe of Finley's hypothesis. *Historia* 58(2):246-256.
- Silvestri 他. 2006. (A. Silvestri, G. Molin と G. Salviulo.) Sand for Roman glass production: an experimental and philological study on source of supply. *Archaeometry* 48(3):415-432.
- Smallwood, E. Mary. 1981. Introduction. G.A. Williamson と E. Mary Smallwood (訳). *The Jewish war*. London: Penguin Books. 9-24.
- Smith, Richard L. 2009. *Premodern trade in world history*. Abingdon: Routledge.
- Stern, E. Marianne. 1991. Early Roman export glass in India. Vimala Begley と Richard Daniel De Puma (編). *Rome and India: the ancient sea trade*. Madison: The University of Wisconsin Press. 113-124.
- Suresh, S. 2011. *Beauty in money: numismatic art and technology of early South India*. New Delhi: Monohar.
- 2004. *Symbols of trade: Roman and pseudo-Roman objects found in India*. New Delhi: Manohar.
- Svalenius, Ivan. 2003. Annaler. Sävedalen: Paul Åströms förlag.
- Swain, Simon. 2002. Dio's life and works. Simon Swain (編). *Dio Chrysostom: politics, letters, and philosophy*. Oxford: Oxford University Press. 1-11. (2000)
- 谷一尚. 2007 年. 『ものが語る歴史シリーズ (2): ガラスの考古学』. 東京: 同成社. (1999 年)
- Tarn, W. W. 1980. *The Greeks in Bactria and India*. New Delhi: Munshiram Manoharlal. (1951)
- Tavernor, Robert. 2009. Introduction. Richard Schofield (訳). *On architecture*. London: Penguin Books. xiii-xxxviii.
- Tchernia, Andre. 2005. The dromedary of the Peticii and trade with the East. F. De Romanis と A. Tchernia (編). *Crossings: early Mediterranean contacts with India*. New Delhi: Monohar. (1997) 238-249.
- Teggart, Frederick J. 1939. *Rome and China: a study of correlations in historical events*. Berkeley: University of California Press.
- Temin, Peter. 2013a. *The Roman market economy*. Princeton: Princeton University Press.
- 2013b. The contribution of economics. Walter Scheidel (編). *The Cambridge companion to the Roman economy*. Cambridge: Cambridge University Press. 45-70. (2012)
- Tempest, Kathryn. 2011. *Cicero: politics and persuasion in ancient Rome*. London: Continuum.
- Thapar, Romila. 2002. *Early India: from the origins to AD 1300*. Berkeley: University of California Press.
- 1992. Black gold. South Asia and the Roman maritime trade. *South Asia* 15(2):1-27.
- Tomber, Roberta. 2008. *Indo-Roman trade: from pots to pepper*. London: Bristol Classical Press. (第2版は2012年)
- 2002. Indian fine wares from the Red Sea coast of Egypt. *Man and environment* 27(1):25-31.
- Warmington, E. H. 1928. *The commerce between the Roman Empire and India*. Cambridge: Cambridge University Press. (第2版は1974年)
- Webster, Graham. 2005. *The Roman invasion of Britain*. London: Routledge. (1980)

- Wedephol と Baumann. 2000. (K. Hans Wedephol と Albrecht Baumann.) The use of marine molluscan shells for Roman glass and local raw glass production in the Eifel Area (Western Germany). *Naturwissenschaften* 87(3):129-132.
- Wendrich 他. 2003. (Wendrich, W.Z., R.S. Tomber, S.E. Sidebotham, J.A. Harrell, R.T.J. Cappers, R.S. Ragnall.) Berenike crossroads: the integration of information. *Journal of the economic and social history of the Orient* 46(1):46-87.
- Wheeler, Mortimer. 1954. *Rome beyond the imperial frontiers*. Harmondsworth: Penguin. (Penguin 版は 1955 年)
- Wheeler 他. 1946. (Mortimer Wheeler, A. Ghosh, Krishna Deva.) Arikamedu: an Indo-Roman trading-station on the east coast of India. *Ancient India: bulletin of the archaeological survey of India* 2:17-124.
- White, Horace. 1912. Introduction. *Roman History*. Cambridge: Harvard University Press.
- Whitehouse, David. 2012. *Glass: a short story*. London: The British Museum Press.
- Whitewright, Julian. 2007. Roman rigging material from the Red Sea port of Myos Hormos. *The international journal of nautical archaeology*. 36:282-292.
- Williams, David F. 2004. The eruption of Vesuvius and its implications for the early Roman amphora trade with India. Jonas Eiring と John Lund (編). *Transport amphorae and trade in the Eastern Mediterranean: acts of the International Colloquium at the Danish Institute at Athens, September 26-29, 2002*. Athens: The Danish Institute at Athens. 441-450.
- Wilson, Andrew. 2013a. Approaches to quantifying Roman trade. Alan Bowman と Andrew Wilson (編). *Quantifying the Roman economy: methods and problems*. Oxford: Oxford University Press. 213-249. (2009)
- 2013b. Raw materials and energy. Walter Scheidel (編). *The Cambridge companion to the Roman economy*. Cambridge: Cambridge University Press. 133-155. (2012)
- 2006. Fishy business: Roman exploitation of marine resources. *Journal of Roman archeology* 19: 525-537.
- Woolf, Greg. 2003. *Becoming Roman: the origins of provincial civilization in Gaul*. Cambridge: Cambridge University Press. (1998)
- Zanker, Paul. 1990. *The power of images in the age of Augustus*. Ann Arbor: The University of Michigan Press. (1988)
- Zitterkopf と Sidebotham. 1989. (Ronald E. Zitterkopf と Steven E. Sidebotham.) Stations and towers on the Quseir-Nile Road. *The journal of Egyptian archaeology* 75:155-189.
- Zvelebil, Kamil. 1956. The Yavanas in old Tamil literature. Felix Tauer, Věra Kubičková, Ivan Hrbek (編). *Charisteria orientalia praecipue ad Persiam pertinentia*. Praha: Československá Akademie Věi. 401-409.